

第65集

研究紀要

三好教育研究所

令和6年(2024)年度

ごあいさつ

今年の夏は、気温が連日35度を越える猛暑の夏でした。そんな季節を越え、秋らしい時期がほとんどないまま一気に冬を迎えたような気がします。何か異常気象を感じずにはられません。私たちにはそれに負けない適応力があります。その力を駆使しながら、日々の教育活動に邁進していきましょう。

日頃は、三好教育会の振興にご支援ご協力いただき、深く感謝申し上げます。「三教だより」でも少しふれましたが、今年一番の関心事が、本年度8月に出された中央教育審議会の答申です。答申には、①学校における働き方改革の更なる加速化 ②学校の指導・運営体制の充実 ③教師の処遇改善の一体的・総合的な推進等の内容が記されています。国として、教職の魅力を向上させ、子供たちの教育のために優れた教師を確保する方針です。それを通して、慢性的な人員不足が解消され、教育の質がより一層向上していくことを心から願っています。また、このような状況の中でも、先生方一人ひとりが、真摯に日々の教育活動にご尽力くださっていることに改めて敬意を払いたいと思います。そして、三好教育会並びに三好教育研究所の事業が、山積している教育課題を共に解決する場であり続けることを願ってやみません。

さて、昨年度より、従来通り三好教育研究発表会は池田総合体育館に参集しての開催となり、本年度は、榎生小学校と三好教育研究所に発表していただきました。

○ふるさと西祖谷に夢や誇りをもち、未来の創り手となる子どもの育成

～へき地・複式・小規模校の特性を生かした学校・学級経営の深化・充実をめざして～

榎生小学校 井内 康之 教頭

○主体的に運動する子どもの育成

～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～

三好教育研究所 松本 美穂 研究員

どちらの研究も、学校の特性や発表者の研究目的に応じた熱心な研究がなされ、素晴らしい実践と成果が報告にまとめられていました。これらの取組は、学校や先生方の今後の教育活動の参考になることと思います。

研究発表の後、「ペップトークで自分と子供達の未来を輝かせよう」と題して、マナーセンス代表の湯佐弘子様よりご講演いただきました。ペップトークとは、相手の状況を受け止め、相手の意欲を引き出す言葉かけのことです。この言葉かけは、企業のみならず教育現場にも通じるもので、児童生徒に対して或いは同僚に対して十分に活用することができると感じました。我々教員は、日頃、無意識のうちにネガティブな言葉かけになってしまいがちですが、この機会を得て、是非ポジティブな言葉かけ、ペップトークを多用し、相手の意欲を引き出していきたいものです。そして、この講演の内容を、これからの学校運営に活かし、学校現場がさらに活性化することを期待しております。

なお、この研究紀要は、各学校・各関係機関に1部ずつ配布させていただくとともに、三好教育研究所のホームページにも掲載しますので、ご活用ください。

終わりにになりましたが、本研究紀要の発行にあたりまして、ご指導、ご助言いただいた先生方、研究協力校並びに委嘱研究員の先生方、三好教育研究所の皆様、そして関係各位に心より感謝申し上げますとともに、会員の先生方の教育活動が今後ますます成果の上がるものとなり、ご活躍されることを祈念して、ごあいさつとさせていただきます。

令和7年3月

三好教育会長 新藤 克己

目 次

あいさつ

三好教育会 会長 新藤 克己

—— 研究指定校研究 ——

- ふるさと西祖谷に夢や誇りをもち、未来の創り手となる子どもの育成 …………… 1
～へき地・複式・小規模校の特性を生かした学校・学級経営の深化・充実をめざして～
櫛生小学校 教頭 井内 康之

—— 教育研究所研究員研究 ——

- 主体的に運動する子どもの育成 …………… 11
～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～
三好教育研究所 研究員 松本 美穂
- 別室登校の生徒たちの実際 …………… 24
～アートセラピー的取組とそよかぜ学級～
三好教育研究所 研究員 井川 早苗
- 既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～） …………… 36

研究主題

ふるさと西祖谷に夢や誇りをもち、未来の創り手となる子どもの育成
～へき地・複式・小規模校の特性を生かした学校・学級経営の深化・充実をめざして～

三好市立櫛生小学校 教頭 井内 康之

1 はじめに

本校のある三好市西祖谷山村は、徳島県西部に位置し、眼下には吉野川の支流の一つである祖谷川が流れ、周囲を1,000m級の山々に囲まれた自然豊かな場所である。かつては林業が主な産業であったが、現在は観光業が盛んである。「祖谷のかずら橋」を中心に年間30万人以上の観光客が訪れ、外国人観光客も多い。しかし、最近特に西祖谷地区では、人口の過疎化、少子高齢化が進んでいる。

そのような中、神代踊が令和4年11月にユネスコ無形文化遺産に「民俗芸能『風流踊』」41件の1つとして登録され、関心を集めるようになった。この踊りを継承していこうという機運が高まっている。



2 研究計画

(1) 主題設定の理由

① 児童・保護者・地域の実態

本校では、学校教育目標を実現するため、保護者や地域と連携して教育活動を行っている。子どもたちは明るく素直であり、言われたことはよく守り元気に学校生活を送っている。

しかし、児童数が少ないため、人間関係が固定化しやすく、自ら進んで課題を見つけ解決していくなど、主体的に活動する態度や意欲が十分ではない。また、話し合いの時には、友達の意見に流され、内容を深めていくことが難しい場合もあるため、表現力・コミュニケーション力にも課題があると考えている。さらに自己肯定感が低く、言動に自信がない様子もうかがえる。このような課題を解決するために、近隣校とオンライン等で交流したり、異年齢班による集団活動や各学級での取組を充実させたりしてきた。

保護者は学校の教育活動に対して協力的であり、学校と一体となって子どもたちを育ててくれている。また、地域の方々はいつも優しく家族のように子どもたちに接してくださり、地域ぐるみで小学校の教育活動に力添えをいただいている。

② 本校の今日的状況

令和3年度末で近隣の吾橋小学校が休校となり、令和4年度より西祖谷地区の小学校は本校1校のみとなった。さらに、令和5年度末には、西祖谷中学校が休校となり、本校が地区で唯一の学校となっている。児童数は、ここ数年で大幅に減少してきており、単式学級から複式学級へ移行している。それに伴い、教職員数は減少し、その勤務の期間もおおむね1年～3年間である。

③ 本校の教育活動

学校教育目標

明るく 強く 正しく 伸びるいちうっ子の育成

めざす学校像

笑顔で学び夢や希望がふくらむ学校づくり ～ 子ども一人一人が主役になれる学校 ～
○子どもが主体的に学ぶ学校 ○安心・安全な学校 ○地域と共にある学校

めざす子ども像

<p>「確かな学力」を付ける子ども (知)</p> <p>○個に応じた学習の充実 ○ICTの効果的活用による個別最適・協働的な学び ○読書習慣・家庭学習習慣の確立</p>	<p>自分や他、ふるさとを大切に 心豊かな子ども (徳)</p> <p>○一人一人のよさを認め伸ばす活動の推進 ○ふるさとに学ぶ体験学習の充実 ○自己肯定感の向上</p>	<p>心も体もたくましい子ども (体)</p> <p>○自ら考え判断し行動する力の育成 ○家庭と連携し、基本的な生活習慣の定着 ○運動に親しむ習慣の確立</p>
<p>そのための具体的な取組</p> <p>①「自分のことは自分で①っしょうけんめいに！」 ②「②からを合わせよう」 ③「③れしさを広げよう」</p>		
<p>★楽しく分かる授業 ・主体的・対話的で深い学び ・研修による授業改善 ★タブレット端末の効果的活用 ★読書活動の推進 ・全校児童活動 ・家庭読書の日 ★家庭学習・読書習慣の定着 ・家庭との連携の工夫 ・家庭学習がらぼう週間(習慣)の実施</p>	<p>★特別支援教育コーディネーターを中心に個々のニーズに合った支援の充実 ★認め合うなかまづくり活動の工夫 ・なかよしグループ活動(異年齢・全校活動) ・いいところ見つけ ★ポジティブな行動支援の推進 ★地域とふれあい、地域に学ぶ活動の充実 ・西祖谷神代踊継承活動 ・地域人材 (ボランティア・ゲストティーチャーの活用)</p>	<p>★子ども自らが主体的に取り組める工夫 ・運動会 ・いちうっこフェスティバル ★家庭での基本的な生活習慣の定着へ連携の工夫 ・ほけんだよりでの呼びかけ ★全校体育による運動習慣化の推進</p>
<p>家庭との連携・協力 【子育てパートナー】</p> <p>★「習慣」 基本的な生活・家庭学習・読書・運動</p>	<p>めざす教師像</p> <p>○子どもに寄り添える教師 ○子どもと共に伸びる教師 ○助け合う温かい教職員チーム</p> <p>★働き方改革の推進</p>	<p>地域との連携・協力 【学校のパートナー】</p>
<p>学校運営協議会</p> <p>地域とともにある学校 ～学校・家庭・地域が 一体となって子どもたちを育む～</p>	<p>ナンバーワンスクール</p> <p>つながり学ぼう ふるさと 大好き ナンバーワン ～自分が好き 学校が好き ふるさとが好き～</p>	<p>ステップアップスクール</p> <p>「確かな学力」を育てる 授業の創造 ～「個別最適・協働的な 学び」の実現に向けて～</p>

学校教育目標は、「明るく」「強く」「正しく」伸びるいちうっ子である。そのめざす子ども像を達成するため、①「自分のことは自分で①っしょうけんめいに」、②「②からを合わせよう」、③「③れしさをひろげよう」、の「い ち う」を合い言葉に日々の教育活動を行っている。

このような中、「西祖谷ならでは」の体験活動を継続し、本校の教育活動を支える「ふるさと西祖谷」とのつながりをさらに深めながら、小規模校の特性を生かした教育を推進し、未来の創り手となる児童一人一人の表現力・コミュニケーション力、自己肯定感の向上をめざしたいと考え、本主題を設定した。

(2) 研究仮説

- ① 地域の伝統文化や自然、人との関わりを通して学ぶことは、これまで以上に、ふるさと西祖谷に夢や誇りがもてる児童の育成につながるだろう。
- ② 近隣校との交流や自校の取組を充実させることによる学びは、児童が主体的に活動に参加する態度を養うとともに、未来を創造するために必要な表現力・コミュニケーション力の育成や自己肯定感の向上につながるだろう。

(3) 研究内容

- ① 地域とふれあい、地域に学ぶ活動の推進
- ② 近隣校との交流、自校での取組の充実

3 研究の実際

(1) 地域とふれあい、地域に学ぶ活動の推進

① 神代踊

国・県重要無形文化財に指定されている神代踊は、昔より雨乞いの踊りとして、毎年旧暦の6月25日に奉納されている。令和4年11月にはユネスコ無形文化遺産に登録された。本校においては、2017年から保存会の方に教えていただき活動に取り組んでいる。令和5



年度は、チェーンスクール事業の一環として西祖谷中学校に 【神代踊の練習】

も声をかけ、生徒も練習に参加した。中学生は、小学生の時に踊った経験があり、練習時から児童の模範となっていた。本番も参加し、祭りの担い手として活躍した。本年度の練習は小学生だけであったが、5回行い、本番の日には、練習の成果を発揮し多くの観客たちの前で自信をもって踊る姿が見られた。

後日、振り返って児童が感想を書いたが、「去年より見に来ている人が多かったので緊張したが、間違えずに踊れてよかった。」「受け継ぐ人がいないので、受け継いでいきたい。神代踊についてもっと調べたい。」などの感想があったことから、ふるさとに関心を寄せ、誇らしく思う児童が育っていることを感じた。

② シラクチカズラの植え付け

ふるさと学習の一環として増殖活動につなげるための苗木の植樹を東祖谷の国有林で行った。かずら橋の材料であるシラクチカズラは、近年確保が難しくなっていることなど、シラクチカズラの現状や植樹の意図についての説明を聞いた後、資材確保実行委員会や徳島森林管理署の方たちに植え方を教わりながら植樹した。他の参加者らとともに、100本近くの苗木を丁寧に植えた。この苗木はおよそ30年後には、かずら橋の材料として利用されるそうである。多くの人たちがこの作業に携わっていることを知り、その思いにふれるとともに、文化財を守っていくことの大切さについて考えることができた。また昨年度の2月には、3年ごとに行われている、かずら橋の架け替え作業を見学・体験させていただいたり、質問する時間を設けていただいたりしたことで、その歴史や作業する方たちの思いに触れることができ、児童たちの学びがより深まった。



【シラクチカズラ植え付け】

③ 茶摘み

旧吾橋小学校区で、茶畑を営んでいるお宅を全校児童で訪問し、茶摘みを体験させていただいた。これまでに体験したことのある児童は、要領よく作業できていたが、不慣れな児童は、茶畑農家の方や友達から摘み方のコツを教えてもらいながら作業した。この活動を通して地域の方の優しさに触れることができた。後日製茶したものを自分たちで袋に詰め自宅に持ち帰り味わった。



【茶摘み】

④ コンニャクイモづくり

3年生が総合の時間に、地域の方の協力を得て、コンニャクイモづくりに取り組んでいる。コンニャクイモとは、祖谷の特産物である丸コンニャクの材料である。学校園の畝作りからはじまり、種芋の確保、植え方などを教わり、収穫、コンニャクの調理までしている。



【コンニャクイモ植え】

⑤ 社会福祉施設訪問、年賀状送付

全校児童が学校の近所にある老人福祉施設やデイサービス施設を訪れ、一人一人の方に、自分たちが心を込めて折った鶴やラッピングしたポットの花、そして歌をプレゼントした。利用者の方たちは笑顔にあふれ、この日を楽しみに待っていてくれたことが伝わってきた。緊張気味だった子どもたちも次第にうちとけ、お返しに鉛筆立てをいただきうれしそうな表情であった。



【デイサービス施設訪問】

また地域の独居老人の方に、全校児童で年賀状を書いている。一言メッセージを添えて投函するが、なかには手紙で返事をくださる方もおり、それがまた児童の励みになっている。

(2) 近隣校との交流、自校での取組の充実

① 近隣校との交流

ア オンラインでの交流

本年度の5月に、山城・東西祖谷連合で宿泊活動を行った。事前にタブレット端末を利用し、オンラインで互いに自己紹介を行った。宿泊活動当日には、モニター越しに見ていた同じ班の子と共に活動できることにとっても喜びを感じ、普段学校では見られない表情や率先して活動する姿が見られた。



【オンライン交流】

また、下名小学校や東祖谷小学校とは、朝の活動の時間を利用し、交流をしている。自己紹介カードを作成し発表したり、レポートの発表を聞いたりして、学ぶ意欲を高め、主体的に学習することができている。

イ 対面での交流

東祖谷小学校が本校に来校し、対面での交流活動を行った。同じ空間で授業をしたことは、コミュニケーション力をつける大変よい機会となった。話した内容がきちんと伝わっているか、相手がどう思っているか、その反応がオンラインより確認しやすく、自校の子と話す以上に相手を意識した会話ができている。最後に全員でドッジボールを行ったが、大変盛り上がり、楽しそうであった。



【ドッジボールで交流】

両校の児童を混ぜたチーム編成にしたことで、これまでの人間関係とはまた違った関

係が生まれ試合ができたことも関係していると思われる。

また、令和5年度まで下名小学校で行っていたマラソン大会を、本校で実施した。児童たちは、この大会に向けて休み時間を利用し、練習を積み重ねてきた。当日は、低学年の部と高学年の部に分かれて実施し、両校の児童が自己の記録を伸ばそうと、真剣な表情で走る姿が印象的であった。



【ふれあいマラソン大会】

さらに大会後は、交流活動で「わたしはだあれ」ゲームを行ったり、共に給食を食べたり、食育学習で干し芋を作ったりと充実した時間を過ごした。交流活動の最初は緊張して、互いに話す様子が見られなかったが、班に分かれて活動したことで、次第に会話が増え、生き生きと活動することができた。干し芋作りでは、芋を切る役、運ぶ役、片付けなど、教師が指示しなくても、自分の役割を考え主体的に活動する姿が見られた。



【干し芋作り】

② 自校での取組の充実

ア 全校話し合い・委員会活動、なかよし班活動

本校は週に1時間、全校児童で話し合いの時間がもてるよう、学活の時間を、同じ曜日・時間に設定している。話し合いの議題としては、「学校の係決め」、「1年生を迎える会」、「運動会のスローガン」、「社会福祉施設訪問」などがある。どの時間も6年生が中心となり、司会進行などを担当している。司会は、下の学年の一人一人の児童が意見を出しやすいよう、小グループでの話し合いの時間を設定するなど工夫しながら進めている。また下の学年の児童たちは、議題に応じた自分の意見を理由とともに述べている。



【全校話し合い】

委員会活動は、保健委員会、図書委員会、体育委員会の3つで行っている。それぞれが活動内容を考え、全校児童を相手に保健に関する啓発活動をしたり、休み時間の遊び活動の企画運営、図書館祭りなどを行ったりしている。



【保健委員会による啓発活動】

なかよし班（異年齢班）では、朝の活動で草抜きなどのボランティア的活動や、全校児童での遊び活動、給食の配膳などを行っている。これらの活動で大切にしていることは、相手を意識することである。自分の意見をきちんと伝え、反対に相手の話をきちんと聴けているか、どう行動することが望ましいか適切に判断しながら取り組んでいくことである。そのことが、表現力・コミュニケーション力の育成につながり、互いに認め合える関係づくりや自己肯定感の向上につながっていくと考えている。



【遊び活動】

イ 合同体育・音楽

1年生～6年生が1週間に、体育3時間・音楽2時間、合同授業を行っている。普段の学級の枠を越えた集団で授業を行うことで、いつもとは違った人間関係が生まれ、互いに高め合っている。器械運動をはじめ様々な運動にチャレンジしている友達の存在や、互いの賞賛、励ましにより、あきらめずに頑張っている姿が見られる。合唱や合奏においても、互いに感じ合いながら、美しい声や音色を奏でようと心を一つにした学習ができています。

ウ 誕生日のお祝い

給食のあとに、誕生日を迎えた児童を、みんなで祝いしている。歌を歌い、その後、エアケーキで祝福する。とても楽しみにしており、児童によっては、友達の誕生日も覚えていて教えに来てくれる児童もいる。お祝いされた児童は、照れくさそうな表情や、うれしそうなお顔、照れ隠しをしようとちょっと堅い表情になったりと反応は様々であるが、どの子も喜んでいることは伝わってくる。互いに祝い、その存在を認められる時間は、自己肯定感を養えるよい機会となっている。



【エアケーキで祝福】

エ 共同版画制作

地域の伝統文化である神代踊を大切に、伝えていきたいという子どもたちの思いから、神代踊共同版画制作の計画を立てた。ゲストティーチャーを招聘し、4～6年生の児童で取り組むことにした。様々な役割の人物を分担して描いたり、体験した時の様子や思いがより伝わるように、児童たちは話し合いながら、構図や彫り方、彩色を工夫したりした。制作過程では、友達の良さに気づき

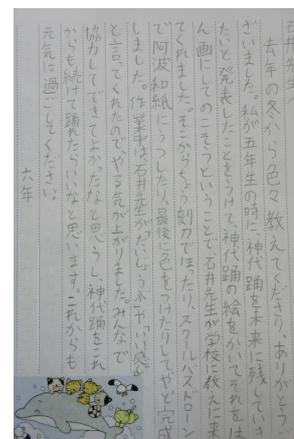


【共同版画制作 彫る作業】

感想を述べる児童や、ゲストティーチャーから褒められ、自身の努力を自覚し喜ぶ児童

童の姿が見られた。異学年で協力し合い、一つのものを仕上げる活動を通して、達成感・成就感を味わうとともに、相手を大切にする気持ちが育まれたり、自分やふるさとの良さに気付くことができたのではないかと感じる。

後日、ゲストティーチャーへお礼の手紙を書いた。そこには、「伝統を大人になっても大切にしたい。」「踊りを未来に残したい。」「先生に褒められてうれしくて、やる気が出て頑張れた。」「作品を協力して仕上げられて嬉しい。またそれが可能になったのは、みんなの努力があったから。」など、それぞれの思いが書かれていた。そこから児童たちの、西祖谷を大切にしたいという気持ちや進んで取り組もうとする気持ち、自己肯定感の高まりが感じらる。さらには、1つの作品をみんなで仕上げたという達成感を味わったり、言語以外の表現力も身についたりしていることが分かる。



【お礼の手紙】



【完成した共同作品】

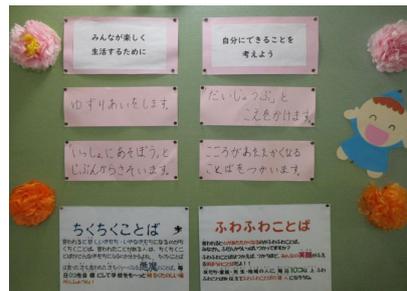
オ 学級での取組

5・6年生では、参観日に「いいところさがし」の時間を設定し、実践した。令和5年度の「学校教育に関するアンケート」における、「自分にはよいところがあるか」という質問に対して、およそ、27%の児童が「分からない」と回答しており、全員が自分のことを肯定できるようになってほしいと考えたからである。自分以外のクラスの友達のよいところを書き、それを読みながら手渡した。また保護者の方にもよいところを書いていただいた。児童の感想には、「自分が気づけなかったいいところに、気づけてうれしい。」とあり、友達や親からよいところを伝えてもらうことで、喜んでいる様子が伝わってきた。授業の最後に担任から、本校のめざす児童像の具現化が図られるよう「低学年や中学年の子のよいところを見つけて、教えてあげることによってみなさんが感じているうれしさを広げられると思いますよ。」と伝えた。友達の良さを考え伝え合うことは、認め合うなかまづくりの第一歩であり、自己肯定感の向上につながっていると考える。このような取組を今後も続けていく。



【授業参観 いいところさがし】

1・2年生でも、「ふわふわことば ちくちくことば」の学習を通して、普段自分たちが使っている言葉について考え、相手を大切にし、温かい言葉を使っていこうとする態度を養った。このことが認め合う仲間づくりにつながっていくと考える。



4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

① 地域とふれあい、地域に学ぶ活動の推進

地域の伝統文化・宝である「神代踊」・「かずら橋」を保存継承していく活動に参加することで、活動に携わる人々の思いにふれることができた。また茶摘み体験やコンニャク作り、社会福祉施設訪問などの活動を通して、地域の素晴らしさに気づいたり、西祖谷で暮らす方々の優しい人柄にふれたりした。自分たちは支えられ、見守られながら生活していることに気づき、今まで以上に、ふるさと西祖谷に夢や誇りをもち、地域に住む人たちを大切に暮らしていこうという意識を高めることができた。

② 近隣校との交流、自校での取組の充実

近隣校との交流においては、例えばタブレット端末を使用した自己紹介カードの作成で、どうすれば相手に分かりやすくなるか試行錯誤したことは、主体的に学習に取り組

もうとする態度や表現力・コミュニケーション力の育成につながったと考える。

自校での取組でも、全校での話し合い活動の充実、共同版画の制作、いいところ探しの授業、誕生日のお祝いなどの実践は、自己肯定感の向上、主体的に学習に取り組もうとする態度や表現力の育成につながったと考える。

それは、児童の作文や全校での活動時に自分の意見をはっきりと言えるようになってきたこと、体育の時間に自然と「がんばれ。」と応援する声が沸きあがること、学級や全校活動などで、友達を肯定的に受け入れ、明るい表情でみんなと共に活動したり、何事もやってみようとする前向きな態度を示したりする児童がこれまでよりも増えてきたことから感じる。児童は自己の良さに気付くとともに、互いに尊重し合いながら協働する集団へと育ちつつある。

(2) 今後の課題

① 教育課程への位置付け

検討する必要があるのは、教育課程への位置付けである。行事はその時間だけで完結することは少なく、活動の事前・事後にも時間を要する場合が多くある。そのため、どの教科に何時間位置付けるか等、教育課程への位置づけをどのようにするか検討していく必要がある。

② 目的の明確化と引き継ぎ

地域の伝統文化を継承する活動に参加することや学校の取組を継続していくことは重要なことで意義深いことである。しかし、単に継続するだけでは活動自体が目的となり、活動が活動で終わってしまう。そのようなことがないよう、その目的をはっきりさせなければいけない。そして、それを教職員間だけでなく、保護者や地域とも共有し、工夫・改善しながら取り組んでいくことが重要である。

また、本校は教職員数が少なく、異動により組織が短期間で変わっていく。そこで、電子ファイルに成果や課題を記録し、確実に引き継いでいくことが課題である。

5 おわりに

子どもたちは、人々と関わりながら様々な活動をすることにより、主体性や表現力・コミュニケーション力を向上させることができている。また、地域の方々や保護者が、常に温かく見守り育ててくれていることを実感し、相手を大切に思う気持ちや自己肯定感も高めつつある。引き続き学校教育目標の達成を目指した取組を推進し、「ふるさと西祖谷に夢や誇りをもち、未来の創り手となる子ども」の育成に努めたい。

主体的に運動する子どもの育成 ～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～2年間のまとめ

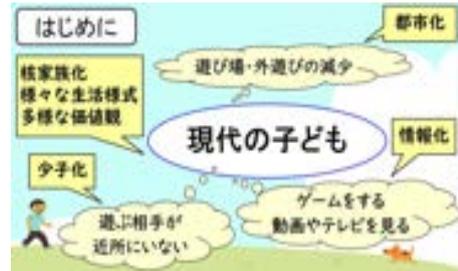
三好教育研究所 研究員 松本 美穂

1 はじめに

現代の子どもたちの背景を考えると、様々な要因から外遊びや運動の機会が減っている。都市化が進む中で遊び場が減少し、特に少子高齢化が加速している山間部や、へき地では一緒に遊ぶ友達が近所にいないため、一人でゲームをしたり動画を見たりして過ごす時間が増えている。

山城小学校の子どもたちに実施したアンケート結果からも、休みの日の遊びとして「ゲームをする」という回答が一番多く、49%とほぼ半数であった。「その他」の中には、「YouTubeやTickTokを視聴する」など、メディア系が多数であった。また、遊び全体から考察すると、一人でできる遊びが多く、やはり少子化の影響が関係しているということが覗えた。

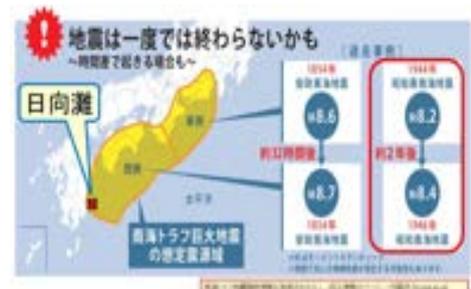
様々な要因から、体全体を使った遊びや運動をする機会が減った子どもたちは「体力の低下」も問題となっている。そこで、変化する社会の中で、たくましく生き抜く力として「体力面での手立て」が必要ではないかと考え、研究のテーマとした。



2 研究の概要

現代社会は、先行き不透明で予測困難な時代であり、地球温暖化や自然災害の多発化など、様々な問題が多様化し、日々変化し続けている。このような社会は、「VUCA時代」といわれている。そこで、まず浮かんだのが今後30年以内に約80%の確率で発生するだろうと予測されている「南海トラフ地震」であった。

気象庁によると、「前回の地震から約80年が経過しており、次の大規模地震発生 of 切迫性が高まっている」とあった。2024年8月8日には、宮崎県日向灘を震源とするマグニチュード7.1、最大震度6弱の地震が発生した。



「南海トラフ地震臨時情報巨大地震注意」が始めて発令され、1週間後に解除されたが、引き続き地震への備えは必要である。

そこで、様々な自然災害に備えるとともに、VUCA時代を生きる子どもたちが、運動することを「いざ！という時に動ける体力『防災体力』を備える」という目的と結びつけることで、主体的に運動する子どもの育成につながるのではないかと仮説を立てた。

第8回日本トレーニング指導学会の発表では、「防災体力」の必要性について述べられていた。考察や現場への提言として共通していたことは、下肢筋力トレーニングの有効性である。特に関心をもったことは、「防災訓練において物的な準備だけでなく、身体的な準備が必要である」ということであった。

運動で得られた、筋力や全身持久力などの体力は災害時に役立つと考える。「もし今、緊急地震速報を聞いたなら、どう行動すべきか」など、普段からイメージトレーニングをすることで、災害を「自分事」として捉え、備えることができるのではと考えた。

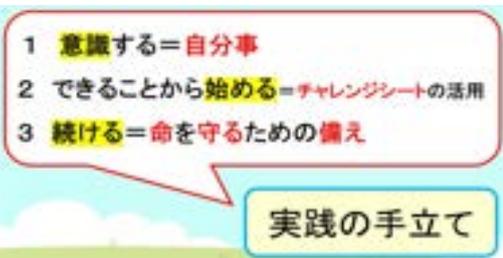
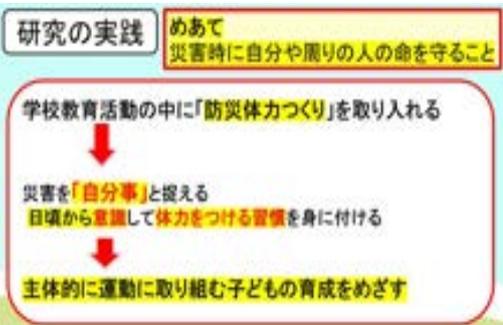
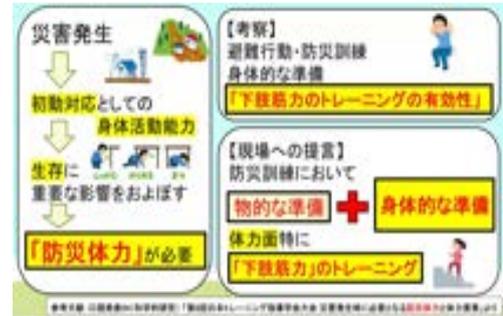
3 研究の実践

まず、「防災体力づくり」を教育活動の中に取り入れることにした。子どもたち一人一人が、災害を「自分事」として捉え、日頃から意識して、体力をつける習慣を身に付けることで、主体的に運動に取り組む子どもの育成につながるのではないかと考えたからである。めあては、「災害時に自分や周りの人の命を守ること」である。

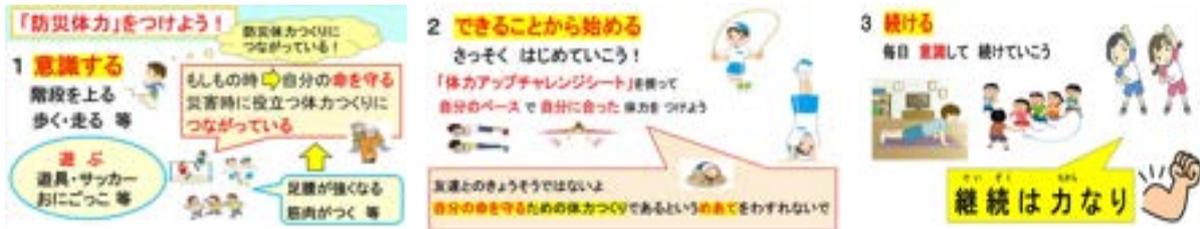
そこで、「意識する」、「できることから始める」、「続ける」の3つの視点を持ち、実践の手立てとした。また本研究は、三好教育研究所と山城小学校をオンラインでつないだ形で取り組んだ。

山城小学校は、国道沿いの道路から児童玄関、教室へと何段もの階段でつながっている。毎日、学校で生活するだけでも自然と足腰が強くなる。

しかし、体力がついていることを意識しながら日々生活している児童はいるだろうかと考えた。そこで、何気ない日常での身体活動が、「防災体力づくり」に



つながっているということ子どもたちに伝えた。遊びや運動をすることによって、足腰が強くなったり筋肉が付いたりして体力が付き、その体力が、もしもの時に自分の命を守ることに「つながっている」と、「意識をすること」の大切さを伝え、価値付けた。「できることから始める」では、めあてを確認し、自分のペースで体力づくりに取り組むことを伝えた。



(1) 体力アップチャレンジシートの活用と工夫

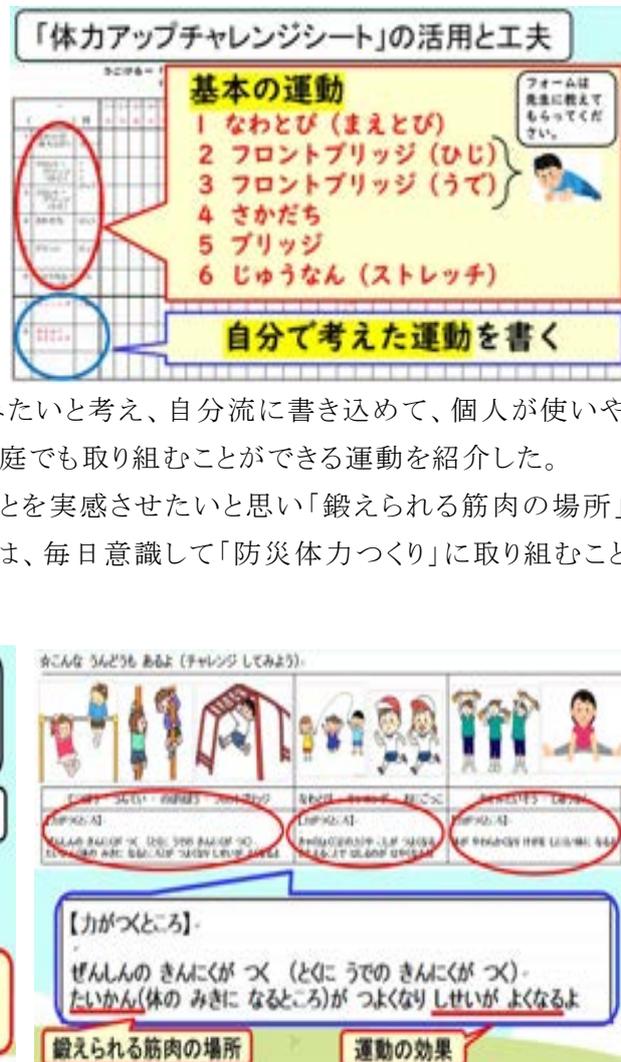
① 1年目の取組

まず、基本の運動を6つ取り入れた。

次に「自分で考えた運動」を付け加える欄を設けた。基本の運動には、災害時に必要になるだろうと考えられる運動を取り入れた。特に、下半身の強化や体幹の強化、柔軟性を重視した。

チャレンジシートは、記入方法をいくつか紹介したが、子どもたちの主体性を育みたいと考え、自分流に書き込めて、個人が使いやすいようにした。裏面には、休み時間や家庭でも取り組むことができる運動を紹介した。

また、運動することで体力が身に付くことを実感させたいと思い「鍛えられる筋肉の場所」や「運動の効果」を記載した。「続ける」では、毎日意識して「防災体力づくり」に取り組むことを伝えた。



「体力アップチャレンジシート」と並行し、週1回程度「防災体力づくり」の時間を設定した。災害についての知識を広げたり、体力づくりをしたりする時間である。

毎回、「今日のミッション」として挑戦する体力づくりを変更し、意欲が持続するよう工夫した。

低学年や支援を必要とする子どもたちにも分かりやすいように、「順番」や「鍛える筋肉の場所」などの表示があり、視覚的にも分かりやすい動画を精選した。



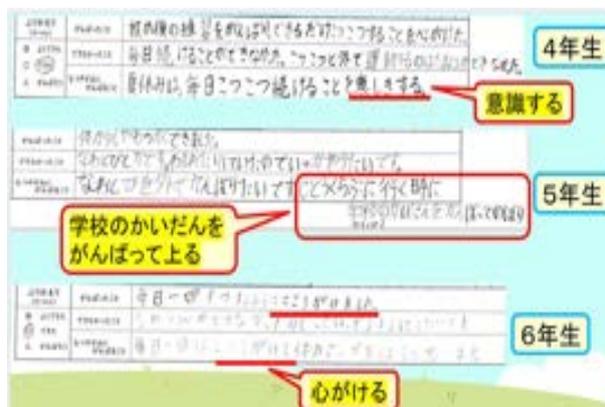
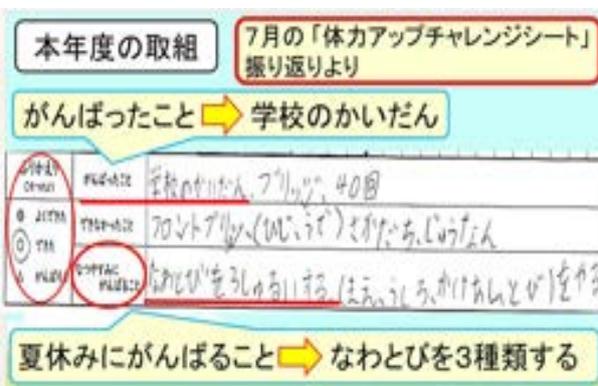
②2年目の取組

研究2年目に入り、7月のチャレンジシートでは振り返りの欄を設けることで一人一人のがんばりや夏休みのめあてについて把握することができた。

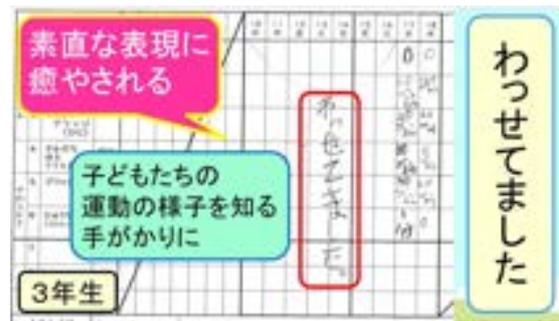
低学年の子どもたちも体力づくりに取り組み、自分が記入しやすいよう工夫していた。

また、「意識する」や「心がける」という言葉から、子どもたちの意識の変容が覗えた。

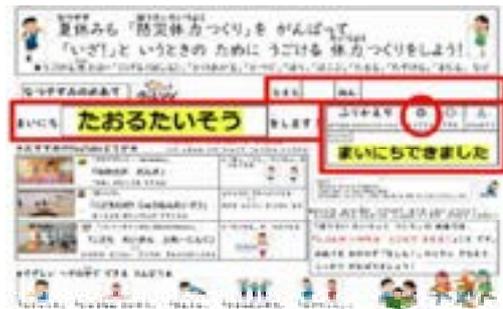
「学校の階段をがんばって上る」というめあてもあり、「防災体力づくり」とつなげて考えていることが分かった。



反省の中には、自分なりの言葉で表現したり、正直に忘れていたことを記入したりしている子どももいて、素直な表現に癒やされた。担任が、毎日チャレンジシートをチェックすることは時間的に余裕がないと難しいが、シートを通して子どもたちの運動の様子を知る手がかりになるのではと考える。「体力アップチャレンジシート」は、各担任が、子どもの発達段階や学級の実態に応じて活用し、実践できるようにした。

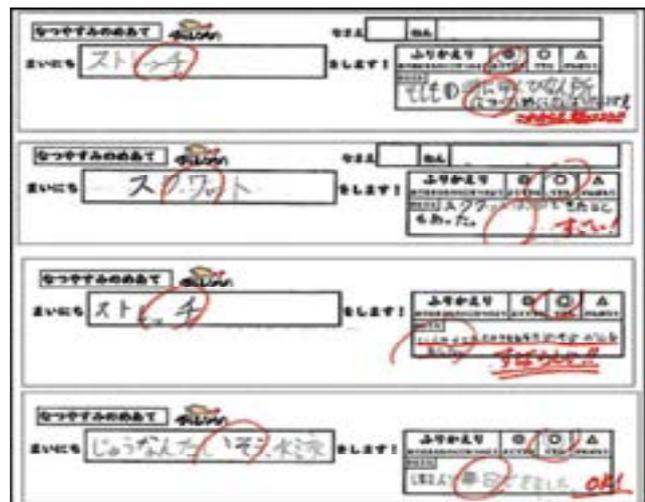


夏季休業を前に、チャレンジシートの「夏休み号」を出した。部屋の中でできる運動や、おすすめの動画を紹介した。また、夏に多い災害についての備えや「避難警戒レベル」について掲載し、夏休みに家族と一緒に「避難場所の確認」や「非常持ち出し袋」を揃えることができるようチェックリストを掲載した。



【チェックリスト】

夏休みのめあてと振り返り



(2) 避難訓練や防災の要素を取り入れた競技実践

授業参観や運動会等で、避難訓練や防災の要素を取り入れた競技を実践し、学校・家庭・地域が一体となった「防災体力づくり」への意識付けと、防災学習の実践に取り組んでみてはどうかと考えた。

① 避難訓練

山城町は、これまでに、大雨や台風による被害に遭っている。山間部のため、道が崩れたり、山が崩れたりするなどの土砂災害が多い。

昨年度は、学校・家庭・地域が一体となった防災避難訓練も実施されており、防災への意識の高さが窺える。



山城小学校では、地域の方が手作りで子どもたちに「防災ずきん」を贈ってくださっている。子どもたちは、自分の机の横に「防災ずきん」を掛け、いつでも避難できるよう備えている。6年間大切に使い、卒業する時には、家に持って帰って洗い、新1年生へと引き継ぎ、大切に使っている。



②運動会での実践

秋季運動会では、中学年が「防災オリンピック 2024」として、親子競技に取り組んだ。親子競技に防災の要素を取り入れて実践したことで、学校と家庭が一体となった「防災体力づくり」ができたと考える。さらに、競技を通して「防災への意識」を高めることができ、「自助」から「共助」へという観点に、視野を広げ、親子で共有することができたのではと考える。

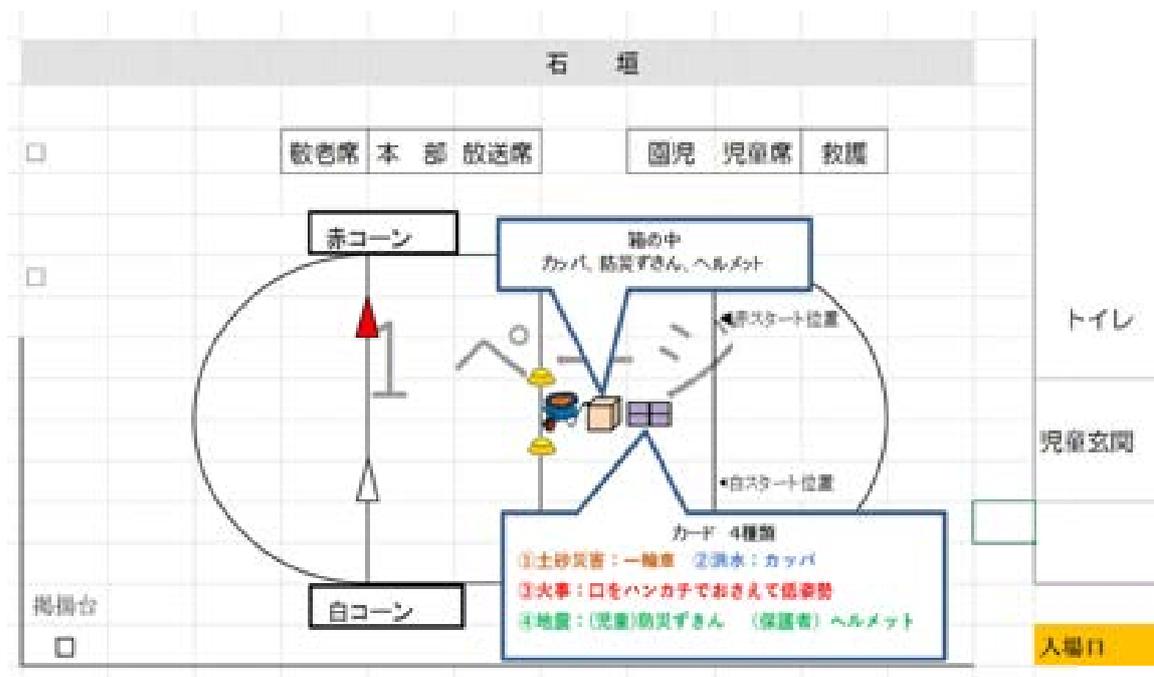
(※以下、3・4年生担任による競技考案)

3・4年生 親子競技 防災オリンピック2024



競技説明 リレーと防災を合わせた競技です、赤組と白組で競走します。

- ①スタートしたらカードが置かれた場所までは手をつないで行き、子どもがカードを1枚選びます。
子どもはカードを高く上げ、会場に見えるように1回まわり、その場にカードを置きます。
- ②カードに書かれた災害に合わせて親子で道具を選びます。
土砂災害 ⇒ 斜面がくずれて土が積もりました。
子どもが土のう袋を一輪車にのせ、大人が運びます。土のう袋が落ちたら子どもがのせます。
洪水 ⇒ 外は大雨です。
親子でカッパを着て、手をつないで走ります。(大人は白、子どもは青か黄色のカッパ)
※ボタンはとめなくてよい
- 火事 ⇒ 火災で発生したけむりを吸わないようにします。
子どもはハンカチ、大人は手で口をおさえ、できるだけ低姿勢のまま手をつないで走ります。
- 地震 ⇒ まず頭を守りましょう。
大人はヘルメット、子どもは防災ずきんをかぶり、手をつないで走ります。
- ③道具が準備できたら図の矢印のようにコーンで折り返します。コーンの内側から外側へ走ってください。
- ④道具を元の場所へ戻してください。(一輪車はマーカーの間に止める、カッパはたたまなくてよい)
- ⑤次の親子と交代、各組の1番後ろに並びます。
- ⑥アンカーの親子が先にゴール(スタート位置の線)した方の勝ちです。





土砂災害のカード



洪水のカード



火災発生のカード



地震のカード

(3) 「共助」や「公助」に視点を広げた実践

「防災体力づくり」の必要性について理解するためには、知識を身に付けることが大切である。そこで総合的な学習の時間に、防災学習として「防災すごろく」や「防災カードゲーム」、「防災かるた」を実施した。

「すごろく」や「カードゲーム」等を通して、知識を身に付け、得た知識と体力を結び付けることでより深く、災害を「自分事」として捉え、防災への備えができると考えた。

徳島県防災人材育成センターが作成している「地震体験シミュレーションすごろく」では、仲間と協力して防災についての知識と、「自助」や「共助」になる力を身に付けることをめあてとして実践した。

また、「国土交通省 水管理・国土保全局 防災課 防災教育担当」の、「防災カードゲーム」や徳島県防災人材育成センターの「防災かるた」も活用した。

①防災すごろく



【すごろく板】
説明書→



【オンラインで「すごろく」の説明】



【すごろくで使う「イベントカード」と「アイテムカード」の一部】



【「地震体験シミュレーションすごろく」の様子】

【質問コーナー】
わからないことや、質問があれば、タブレット前まで来て質問する。



3・4年生が3班に分かれて「地震体験シミュレーションすごろく」に挑戦



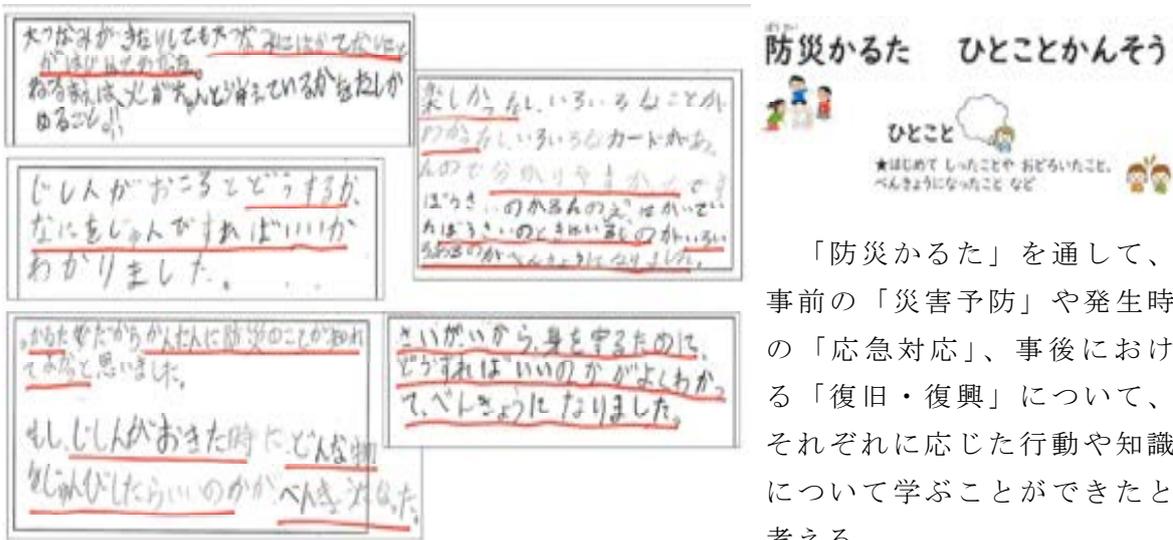
「イベントカード」や「アイテムカード」を引き、仲間と協力しながらコマを進めることができた。



③防災かるた



「防災かるた」の一部



「防災かるた」を通して、事前の「災害予防」や発生時の「応急対応」、事後における「復旧・復興」について、それぞれに応じた行動や知識について学ぶことができたと考ええる。

④防災グッズ作成

「防災すごろく」や「防災カードゲーム」、「防災かるた」等で知識を得た後、4年生が防災グッズの作製にチャレンジした。

新聞紙を使った食器作りに挑戦し、他にも身近な物を活用することで、防災スリッパや簡易トイレ等も作製できることを学んだ。

「防災体力づくり」と並行して、「すごろく」や「かるた」等を通して知識を得ると共に、実際に、防災グッズを作製する活動を通して、子どもたちの「防災への意識」が高まっていると考える。



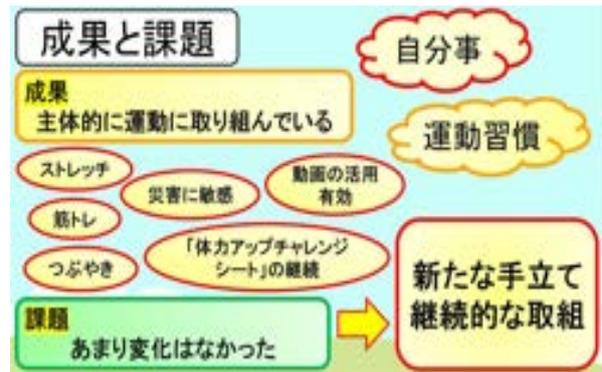
4 成果と課題

教職員へのアンケートから、子どもたちが以前より、主体的に運動に取り組むようになってきた様子として、「休み時間や家庭でストレッチや筋トレを進んでしている」、「家庭においても運動することが習慣化されている」などの回答が得られた。

また、休み時間に「体力つけな！」と言って運動場へ出かけている子どものつぶやきや、「災害のニュースに対して以前より敏感になったように感じる」という回答もあり、少しずつではあるが、子どもたちの意識が変化し、災害を「自分事」として捉えている様子が覗えた。その他、動画の活用が有効であったことも分かった。また、「運動習慣が身に付きつつあるので、体力アップチャレンジシートは続けてほしい」という意見もあった。

しかし課題として、「あまり変化はなかった」という回答もあり、今後、新たな手立てや継続的な取組が必要であると考えている。

また、時間を設けて取り組むことが難しいという課題がある。そこで、「ながら運動」や「ながら生活」を提案したい。例えば、日常の身体活動が「防災体力つくりにつながっている」と意識しながら生活することである。時間を設けなくても「防災体力つくり」に取り組むことができ、意識することで運動の効果がアップすると考える。



5 おわりに

災害は、想定外のことばかりかもしれない。三好地域外や県外に出かけていて災害に遭うことも考えられる。その時、避難場所がどこか分からずパニックになるかもしれない。子どもたちがどこで災害に遭っても、災害の種類や規模に応じて適切な判断をし、命を守ることを最優先した行動をとってほしいと願っている。そのためにも、我々教職員が率先して「防災」を意識した体力つくりを日頃から心がけることで、子どもたちへの声かけが変わってくるのではないかと考える。

「防災体力つくり」を通して、運動習慣とともに命の大切さや当たり前で生活できることの幸せに感謝する心など、「知・徳・体」の力をバランスよく育み、VUCA時代を生きる子どもたちの「生き抜く力」となるよう、さらに研究を進めていきたい。



6 参考文献

- 口頭発表 04 (科学的研究)
第8回日本トレーニング指導学会大会 災害発生時に必要となる防災体力と体力要素
片山昭彦、宮武伸行、神田かなえ、四国学院大学 社会学部、香川大学 医学部
- 気象庁ホームページ
<https://www.jma.go.jp/jma/index.html>
- 【西日本豪雨】孤立の栗山集落5世帯10人避難 徳島新聞動画 TPV(Tokushima Press
<https://www.youtube.com/watch?v=m-KUAFmlKOW>
- [明日をまもるナビ] 土砂災害の前兆！？消防団員が気づいたある異変 NHK
<https://www.youtube.com/watch?v=Odlvd0zpkgo>
- 中央構造線 を富士山の高さから マッハ 2.6 で見る (字幕対応) Takahashi Suzu
<https://www.youtube.com/watch?v=TJ5IT3EnY8o>
- 【子ども版】 どうなる？ どうする？ 南海トラフ地震への備え 内閣府防災
<https://www.youtube.com/watch?v=-R5mnlLouqg&t=9s>
- 【神業】 一人前の消防士になるには過酷な訓練が！ 凄すぎる消防士たち 神戸市消防局
A Japanese fireman's 日本政治新聞
<https://www.youtube.com/watch?v=TFTdJlyIw4I&t=27s>
- 消防士と一緒に家で運動しよう！ City Ichihara
<https://www.youtube.com/watch?v=WkixnNxVvrk&t=9s>
- 「タビワダンス / tabiwadanc」
<https://www.youtube.com/watch?v=xd1KdNIPtSM>
- 「家トレTV」 「こどもむけ！ じゅうなんたいそう」
<https://www.youtube.com/watch?v=iRlaJXVGp90>
- 「バレリーチャンネル_VALLELYchannel」 「こども たいかん とれーにんぐ」
<https://www.youtube.com/@VALLELYchannel>
- セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン/ Save the Children Japan
<https://www.youtube.com/@SaveTheChildrenJpn>
- 株式会社シンク、防災スポーツ「防スポ」
<https://bouspo.jp/>
- 徳島県立防災センター
<https://www.pref.tokushima.lg.jp/bousai-center/workOn/study/diceGame>
<https://www.pref.tokushima.lg.jp/bousai-center/>
- 徳島県防災人材育成センター「地震体験シミュレーションすごろく」
- 国土交通省 水管理・国土保全局 防災課 防災教育担当「防災カードゲーム」
- 徳島県防災人材育成センター「防災かるた」

別室登校の生徒たちの実際 ～アートセラピー的取組とそよかぜ学級～

三好教育研究所 研究員 井川 早苗

1 はじめに

文部科学省により全国の学校を対象に行われた、「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒の指導上の諸課題に関する調査」によると、年間30日以上登校せず、「不登校」とされた小中学生が、2023年度は過去最多の34万6482人に上った。増加は11年連続で、前年度より4万7434人多く30万人超えは初めてである。調査結果によると、不登校の児童生徒は小学校13万370人（前年度比2万5258人増）、中学21万6112人（前年度比2万2176人増）だった。なお、病気による長期欠席も近年増えており、この中に実質的に「不登校」となっている



者が含まれているという指摘もある。不登校の児童生徒の欠席日数は、「90日以上」が55.0%で最多。「出席日数ゼロ」は3.1%だった。

増加の要因としては、生活リズムの乱れや学校活動の減少などコロナ禍の影響の継続や特別な配慮が必要な子への適切な指導・支援の不足などが挙げられている。

計 34 万 6 4 8 2 人

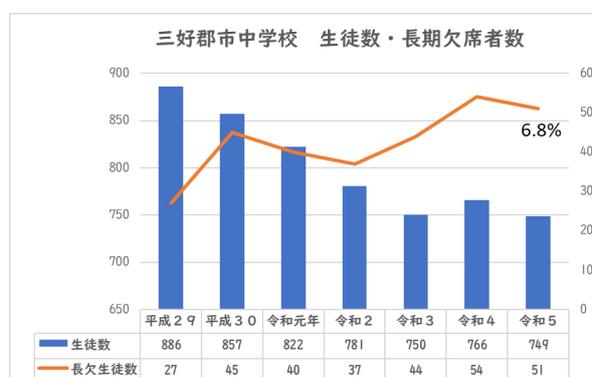
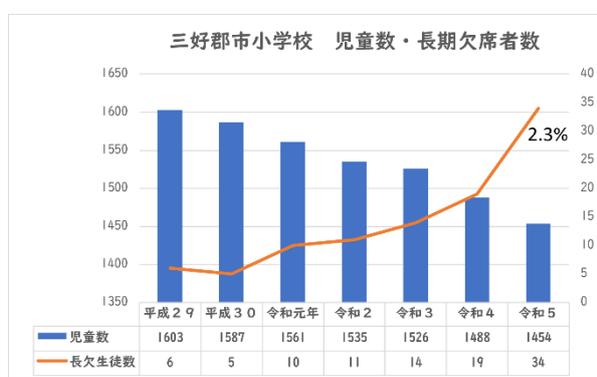


また、文科省が近年、児童生徒の休養の必要性を明示した「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」の趣旨の浸透も大きい。この法律では、不登校は誰にでも起こり得ることであり、不登校というだけで問題行動であると受け取らないよう配慮されることや、学校に登校するという結果のみを目標とせず、子どもたちが自分の進路を主

体的に考えられるようにすることを後押しすることなどが盛り込まれ、保護者の不登校に対する捉え方の変化につながったと考えられる。

文部科学省では、令和5年3月に「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」(COCOLOプラン)を取りまとめ、校内の支援ルームへの登校やオンラインによる家庭からの授業参加など、不登校児童生徒の多様な状況に応じる取組をめざしている。このように、過去最多となっている不登校児童生徒に加えて、学校には登校できるが自分のクラスには入れない生徒や、集団の中や通常の学校生活の流れから一時的に離れて、少し気持ちを落ち着かせてリラックスしたい生徒が増加している。そのような生徒が落ち着いた空間の中で自分に合ったペースで学習や生活ができる環境が、学校の中に必要とされている。

三好教育研究所による三好地域長期欠席者数調査によると、令和5年度の三好地域の小学校の長期欠席者は34人で前年度から15人増加しており、全体に占める割合が1.2%から2.3%と、この1年間に急増した。また、中学校の長期欠席者は51人で3人減ではあったものの全体に占める割合が6.8%とかなり高くなっている。



2 研究の目的

私が在籍している中学校でも、この10年間で、登校することはできるが集団の中に入ることができない生徒や、一時的に教室以外の空間で気持ちを落ち着かせ静かに過ごしたい生徒が増えてきた。10年前には保健室で短時間過ごす生徒の姿が少数見受けられたが、年々人数も滞在時間も増えていき、一日を通して保健室で過ごす生徒も出てくるようになっていった。その後、コロナの影響で体調不良者が増え、保健室の使用が困難になったことと、過密を避けて広い空間が必要になったことで、他の教室に比べて使用する時間が少なく、保健室とカウンセラー室、そして、北入口に隣接している被服室が別室登校の生徒たちの居場所となっていった。

現在別室登校をしている生徒は3年生3名、2年生2名、1年生2名の計7名である。被服室ではそれぞれが担任と話し合いのもと、タブレットで配信の授業を受けたり、プリント学習をしたり、気分や体調が落ち着いているときにはクラスに入って授業を受けたりしている。また、読書や絵を描くなどの自分が好きなことをして、心が落ち着く時間も作っている。別室で過ごしている生徒の3名は美術部に籍を置いていることもあり、好きなイラストを描いている様子がしばしば見られた。絵を描くことが好きな生徒にとって絵画制作は心をリフレッシュさせることができるようだ。このような別室登校の生徒たちの様子を見て、絵画制作を行うことで、生徒たちの心のケアにつなげていきたいと考えた。心身が発達段階にある生徒たちは、身体的な不調を訴えて保健室に来る場合でも、心の問題が根底にある場合が多く、その心の問



題を上手く言語化できない場合がよく見られる。言葉だけのコミュニケーションでは十分な相互理解が得られないことが多く、絵画による自由な表現をもとに内面にある心象の表現によって自己を開放し、お互いを認め合い、新しい自己を発見できるのではないかと考えた。

「芸術療法」という言葉を聞いたことのある人は多いと思う。心理療法の中で芸術を用いる方法であり、絵画だけでなく、陶芸、音楽、心理劇、ダンス、詩歌までも含まれる。「絵画療法（アート・セラピー）」は様々な創造の分野に関わる芸術療法の中にあって主要な位置を占めている。私は美術科の教員としてその絵画療法（アートセラピー）的な美術を生徒たちと一緒に取り組み、心理的な安定やリラックス効果などの美術の新しい側面を見つめ直し、これからの不登校児童生徒への支援を考える上での美術科の可能性を見つけたいと思い本研究を進めることにした。

「芸術療法」というと、作品から制作者の精神状態を分析したり解釈したりすることを目的

絵に関するアンケート ()

時間があるときにすることは？ (複数回答OK)

- 1 ゲーム
- 2 読書
- 3 勉強
- 4 TVを観る
- 5 動画を観る
- 6 音楽を聴く
- 7 絵を描く
- 8 料理をする
- 9 手芸
- 10 散歩
- 11 その他 ()



絵を描くことが好きですか？

- 1 すき
- 2 どちらかというとき
- 3 どちらかというときらい
- 4 きらい



どんな絵を描きますか？ (複数回答OK)

- 1 オリジナルのイラスト
- 2 好きな絵の模写
- 3 風景や静物 (花など)
- 4 想像画
- 5 その他 ()
- 6 まったく絵は描かない

自分はどうして絵を描くと思いますか？

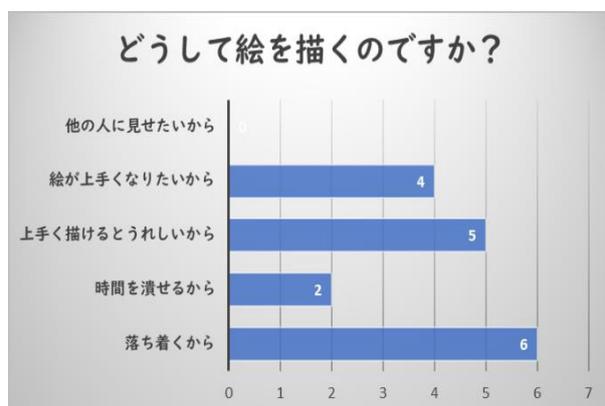
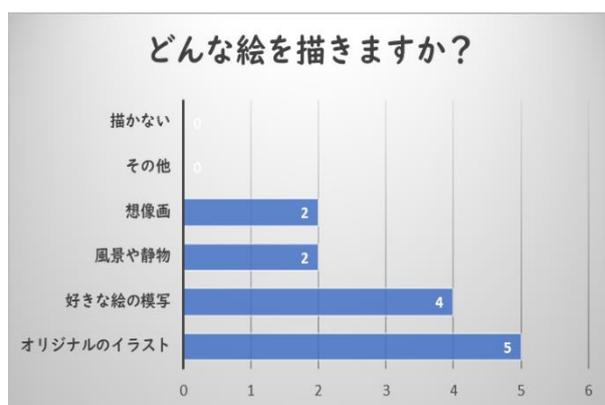
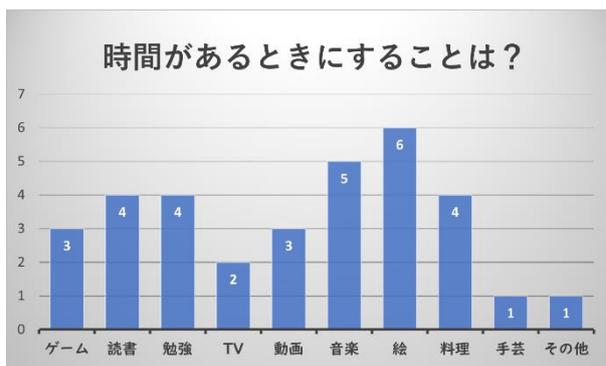
- 1 落ち着くから
- 2 時間をつぶせるから
- 3 うまくかけるとうれいから
- 4 絵がうまくなりたいから
- 5 他の人に見せたいから
- 6 その他 ()
- 7 まったく描かないのでわからない



としているように感じる人が多いだろう。ここでの取組では、作品が生み出される過程で生じる心の変化や様々な気づきを体験することが重要だと考える。他人が制作者の心理を読み取ろうとすると、自由に制作ができなくなり安心した空間ではなくなってしまう恐れがある。制作者は安心して自分の内面的世界に触れ、自分の心と触れ合い、客観的に見つめ、気づくという行為が行われなければならない。安心して作品をつくることができたならば、できた作品について話したくなるかもしれない。また、他者が制作した作品に興味をわき、何かコメントしたくなるかも知れない。そこから自然なコミュニケーションの場面が生まれ、他者とのつながりや、他者の良いところを認める心、自己肯定感の向上が見られることを期待する。

3 研究の実際

(1) 事前アンケート



本研究に取り組む前に、別室登校の生徒たちに簡単なアンケートを取った。時間があるときにすることでは、絵を描くことが一番多く、二番目が音楽を聴く、三番目は読書、勉強、料理が続いた。確かに、被服室で過ごす生徒たちが自由時間にスケッチブックにイラストを描いている様子をよく見かける。そのため、次の「絵を描くことが好きですか」という質問には「好き」とであると全員が解答した。「どんな絵を描くのか」という質問には、「オリジナルのイラストや好きな絵の模写」と答えた人が多かった。最後の、「どうして絵を描くのか」という質問には、「落ち着くから」と全員の生徒が答えた。好きなキャラクターいわゆる「推し」を眺めながら制作することは、精神を安定させる効果があるのかもしれない。当該校の別室登校の生徒たちは自分で考えたキャラクターの絵を描くことが好きな生徒たちが集まっており、絵を描くことで気持ちを落ち着けていることが分かった。しかしながら、一般的には幼い頃は好きだった「絵を描く」という行為がおとなになるにつれて「苦手」という人が増えてくる。「絵を描きませんか？」という誘いに「絵は苦手だから」「センスがない」「絵心がない」「色塗りが苦手」などの自信の無さから敬遠するケースが多い。「写実的に描かなければならない」という思いがどうしてもあるからだろう。上手く描けないという思いがプレッシャーになってしまえば美術を用いての取組は逆効果になってしまう。

そこで、画力が影響せず、誰もが気軽に取り組める方法を考えた。それは美術の技法(モダンテクニック)を使った制作である。学校での創作活動の導入や作品のアクセント

としてもよく使われるが、技法を使えば作品の出来映えに巧拙の問題が起こりにくく、自信を持って自由な表現ができる。様々な技法を体験することで、少しでも自己肯定感や他者理解につながればよいと考えた。

(2) アートセラピー的取組

①こすりだし (フロッターージュ)

準備物：凸凹したもの（100均で購入）、コピー用紙、色鉛筆、クーピーなど

20世紀初頭に理性や意識にコントロールされては到達できない「無意識」や夢をもとに表現するシュールレアシズムの画家マックス・エルンストがフロッターージュという技法名で葉っぱや木目の模様を写し取って、無意識のイメージを作品にした。難しそうであるが、子どもの頃、10円玉の上に白い紙を置いて模様を写し取った経験はないだろうか。物体の凹凸を写しとる方法は、唐の時代から中国にあった「拓本」と同じ原理である。

生徒たちは机上に広げられた様々なものに「わあ！きれい。」「触っていいですか？」など感嘆の声を上げた。普段は殺風景な空間にキラキラしたものやカラフルなものを広げるだけ、それだけでもわくわくしてほしいと思ったが、興味関心は持ってもらえたようだった。いくつかの見本を見せ、「きれいに仕上げようとかは考えなくていいよ。」「好きなものを選んで、好きな色でこすりだしてみよう。」とアドバイスすると、それぞれが好きなものを手に取って制作を開始した。コツをつかめてきたようなので、「できた作品にタイトルをつけよう。」「何かに似ているとか、〇〇な感じがする、など、色や形から思いつく言葉を考えるといいね。」と課題を与えた。普段はあまり会話のない生徒たちが「これ何に見える？」「それいいね！」などを会話する場面が多く見られ、楽しい雰囲気の中制作が進んでいった。和やかな雰囲気の中3年生の一人が「先生、外に葉っぱを取りに行っていていいですか？」と言ってきた。「いいねえ。自然の素材を使いたいと思ってたんよ。」その言葉を合図にみんなが一斉に立ち上がった。「久しぶりにみんなです外に出たね。」「この葉っぱ、虫おらんよなあ。」「これって、使えるかな？」などと、最初は小さな声だったおしゃべりが、だんだん明るく大きな声になってきた。それぞれが気に入った葉っぱを採って被服室に戻った。最初はおそるおそる塗り始めたが、最終的には面白い作品がたくさん出来上がった。木の枝や石を持ち帰っておどけてみせる先輩の姿に自然と笑いが起こり、自由に制作できる雰囲気を創り出すことができ



た。できた作品にタイトルをつけ、簡単に感想を言い合った。これまで、他学年同士が会話することはほとんど無かったようだが、「優しい感じがする。」と先輩に言われて嬉しそうにする生徒や自由気ままに制作する先輩が「エネルギーッシュで面白い。」と後輩からコメントされ、「ありがとう！」と大きな声で答える場面が見られた。

② スポンジでのスタンピング

準備物： スポンジ（カットしたもの）、絵の具、画用紙、パレット

スタンピングとは型押しとも言われ凸凹のあるものや、葉っぱ、キャップなどに絵の具をつけて形を写し取る技法である。ここではスポンジを使ってスタンピングをすることで筆では表現しにくい、グラデーションやぼかしの表現を体験し、自分の中の気持ちを主に色彩で表現してみたい。今回のように、内面の表現では美術の知識が作品に込めた思いを理解し、表現をサ



ポートする上で役に立つことがある。本来ならば、色の三要素を学んだ上で、赤や黄色を明るいと感じるのは、ただ単に明度が明るいからという理由とは違うことを理解させておきたい。暖色、寒色、中間色の違いはなんとなく理解しているが、暖色は興奮色であり進出色であること、寒色はその反対で鎮静色であり後退色であることも加えて理解させていると表現や理解力が広がる。また、反対色である補色は引き立て合い反発もし、混ぜると濁ること、グラデーションなどの構成美の要素はより高度な内面の表現にもつながるであろう。



しかしながら、ここでの制作は知識重視でもいけない。制作に途中で悩んでいるときにこのような知識をアドバイスとして与え、サポートすることにした。

生徒たちが配信の授業をしている合間に、邪魔にならないように用意をしていると、「今日は何をしますか？」と興味津々な生徒も出てきた。作業を説明し、「どんな気持ちを表現したい？」「楽しい気持ちは何色かな？」などと教師対生徒の会話が始まった。そのうち生徒同士の話し合いが始まっていった。先にタイトルをつけることにして制作を開始した。最初は戸惑いながらも教師の見本や周囲の友達の様子を見ながら、ふんわりと色づくスポンジでの制作を楽しんでいた。「朝の花」「明るい夜」などしっかりとした構想を持って制作することができていた。完成後に一人ずつタイトルと簡単な説明をしてもらった。少し緊張感が漂ったが、3年生が「ここがすごくいいね。」「そこは〇〇しているのね。」などと下級生をフォローして場を和ませてくれたのが印象的であり、とても楽しい時間となった。

③ドリッピング・スパッタリング

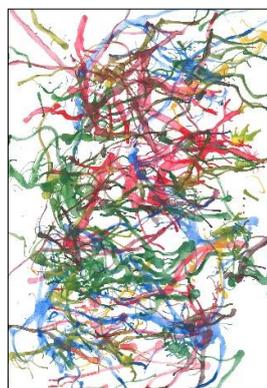
ドリッピング準備物：ストロー、筆（スポイド）、パレット、絵の具、画用紙
 スパッタリング準備物：ぼかし網、ブラシ、画用紙、パレット、筆



ドリッピングは、画家ジャクソン・ポロックの代名詞ともいえる技法で、絵の具を染み込ませた絵筆を床に置いたキャンバスに近づけ、絵の具を画面に塗布することなく飛沫を散らして着色する技法である。多めの水で溶いた絵の具を使用し、キャンバスを傾けたりストローで息を吹きかけたりして、偶発的なデザインを創り出すものだ。簡単にモダンな柄が作れるため、抽象画の制作に適している。別室登校の生徒たちに、「以前掲示していた2年生の作品はこの技法を使っ



スパッタリング



ドリッピング

て描いたんだよ。」と伝えると、その作品を見たことのある2、3年生は、「あ、あれですね。どんな方法で制作したのか気になっていました。」と、興味津々で取り組んだ。画用紙に垂らした絵の具をストローで思いきり吹いたのだが、肺活量が必要なので、休憩をしながら励まし合いながらの制作となった。

ドリッピングが完成した生徒はスパッタリングに挑戦した。スパッタリングとは絵の具をブラシにつけて、ぼかし網の上でこすり、細かい霧状のしぶきを画用紙に飛ばす技法で、ふ

んわりとした色あいの濃淡を表現できる。絵の具の量をつけすぎたり、濃度が濃すぎたりすると画用紙に飛び散らない。何度か失敗しながら、しばらくすると「わあ、星空みたい。」という声が聞こえてきた。

④ビー玉アート

ビー玉アートは私が池田支援学校で勤務していたとき、車椅子の生徒たちができるだけ自分だけの力で制作できるものはないかと考えて取り組んでいた制作方法である。これは、空き箱を用意し、底の大きさに合わせた画用紙を敷いて、絵の具を浸したビー玉を入れてコロコロと転がし、転げた跡が面白い線をつくり出す方法で作品よりも制作過程を楽しむものである。絵の具に浸される前のビー玉はキラ



キラと美しく、生徒たちの興味を惹いた。紙コップの中の絵の具にまみれたビー玉をスプーンですくって箱の中へ落として

いたのだが、制作が進むと、手が汚れることも気にせず、素手で取り出して豪快な制作風景となっていた。「思ったより、きれいに線がでる。」「転がすだけでこんな絵が描けるなんて楽しい。」と生徒は語ってくれた。箱を大きなものにしてボールを入れたり、鈴を入れて音も楽しんだり工夫次第でいろいろなことができそうな技法である。

4 そよかぜ学級の実際

一日の過ごし方	
9:00～10:00	自由活動
10:00～12:00	学習活動
12:00～13:00	昼食・昼休み(昼食は各自持参)
13:00～14:00	自由活動
水・土・日・祝日・長期休業日は休業	



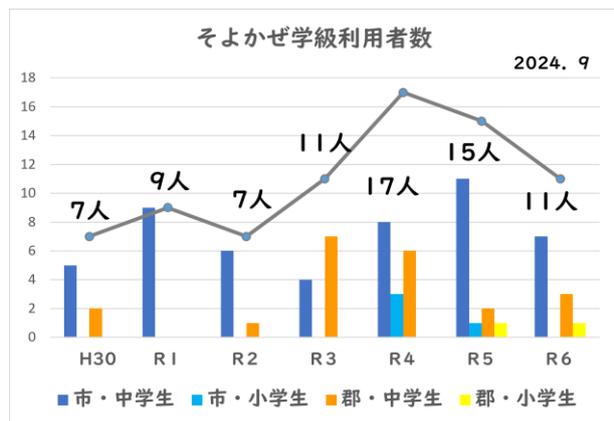
掌造りが印象的な「夢創りの間」が広がっている。生徒たちは、「この古い感じが落ち着く。」と、うれしそうに話してくれた。

近年のそよかぜ学級の利用者はグラフのようになっている。ここ数年は10人を超えるようになり、小学生も名簿に加わるようになってきた。しかし、実際にそよかぜ学級を

(1) そよかぜ学級について

徳島県には市町村が設置する教育支援センター(適応指導教室)は14施設あり、三好郡市には「三好市適応指導教室(そよかぜ学級)」がある。そよかぜ学級は、さまざまな理由で学校に通学することが困難になっている三好市・三好郡の子どもたちが、現在の小・中学校に在籍したまま、一時的に通学するところである。そよかぜ学級は、毎週月・火・木・金曜日の午前9時から午後2時までとなっており、1時間以上出席した日は、在籍校で出席扱いになる。また、学校とそよかぜ学級を併用することも可能である。一日の過ごし方の基本の流れは決まっているが、児童生徒のその日のコンディションで自主的に決めることができる。

そよかぜ学級は、うだつの町並みが残る阿波池田たばこ資料館内にある。看板もないため躊躇してしまうが、入り口で声をかけて中に入ると、どこか懐かしい日本家屋が奥に長くつながっている。中庭は美しく手入れされており、渡り廊下にはレトロなポスターが飾られている。廊下の行き止まりにある扉を開けると、たばこにちなんだ資料が数多く展示されており、幕末から明治までの池田の繁栄を偲ぶことができる。その奥の急な階段を上ると、梁がむき出しの合



利用している児童生徒の数は、登録している人数の半分にも満たないのが現状である。令和6年度も11名が名簿に登録されているが、毎日続けて参加している生徒は2、3名である。そのうち2名が進学を控えた中学3年生のため、来たらすぐに準備を始め、それぞれの勉強を黙々と続けることが多い。今年度より、三好教育研究所がそよかぜ学級の学習支援に関わることになった。ここでは、そよかぜ学級の現状を報告する。

(2) そよかぜ学級の活動から

①父の日のプレゼント作り



2名の生徒のうちの一人与昨年まで関わっていた先生が、退職後、生徒の様子を何度か見に来てくださった。中学校で家庭科の授業を受けた経験のない二人だったので、エプロン作りの指導に来てくださることになった。生地のカットやアイロンがけ、ミシンの使い方などを丁寧に指導していただき、おしゃれなエプロンが完成した。定期的に父の日が近かったため、父の日のプレゼントにしようということになった。そこで、エプロンに添える「ポップアップカード」をつくることを



提案した。クラフトパンチで色紙を型抜きして貼り付けたのだが、生徒たちがしようとしても力が弱すぎて上手く出来ない。体重を手先にかける

ことが難しく、しばらく悪戦苦闘が続いた。少し手を添えて手助けするとなんとかパーツを作ることができた。その後、台紙にレイアウトを考えてコラージュし、メッセージを添えて仕上げることもできた。

②校外学習

そよかぜ学級では学期に1回校外学習を予定している。令和6年7月には「サードプレイス～楽食みのり～」でパン作りをする校外学習があった。講師の先生のご指導で、動物の形をしたちぎりパンとブリオッシュという本格的なパン作りをした。正確に分量を量り、丸める作業に、戸惑いながらもコツをつかんでくるとテキパキとこなしていった。普段のそよかぜ学級では、同じ空間にいるのだが、会話することのない二人だったため少し心配していたのだが、作業中は楽しそうに会話し、一気に関係が親密なものになっていった。あっという間に時間が過ぎて、焼き上がったパンと一緒においしいサラダとおかずでおしゃれなランチをいただいた。最後の挨拶では、自分たちのために大勢の人たちが協力してこのような楽しい催しを計画してくれたことに対する感謝の気持ちをみんなの前で堂々と述べることもできた。集団の中で協力



して作業しながら美味しいパンを作ることができた達成感と、相手に自分の気持ちを伝えることができた満足感でいっぱいの二人だった。



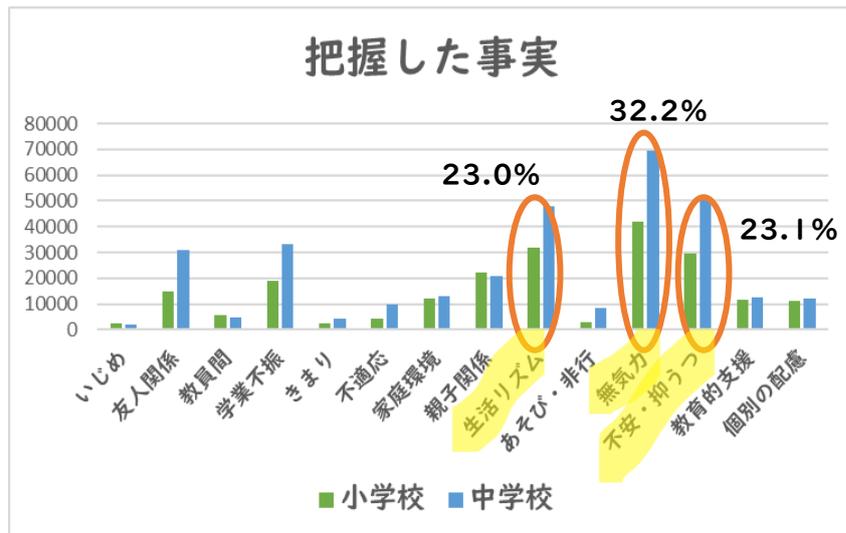
③いのちの授業

この日はそよかぜ学級で「命の大切さ」についての体験学習を行うことになった。外部講師の先生が来て、命についての授業をしてくださった。「今までにこんなことを聞いたことはありませんか。」という質問に、「小学校で勉強した。」「保健体育で習った。」などと答えてくれた。黒い色画用紙に小さな穴の空いたカードをいただいたが、その穴の大きさが卵子の大きさだと聞



いてみんなで驚いた。また、そよかぜ学級の卒業生が赤ちゃんを連れて来てくださり、体験談を聞いたり、質問をしたりした。赤ちゃんの人形を触るのを嫌がった生徒が、最後には本物の赤ちゃんを恐る恐る抱っこすることができた。他にも、「落としてしまうかもしれないので抱っこするのが怖い。」と言っていた生徒が、赤ちゃんを間近で見ると、小さな手や足を触ってその柔らかさに感動したりしていた。それぞれが、その人なりに大切な命を実感できた貴重な一日となった。

5 考察

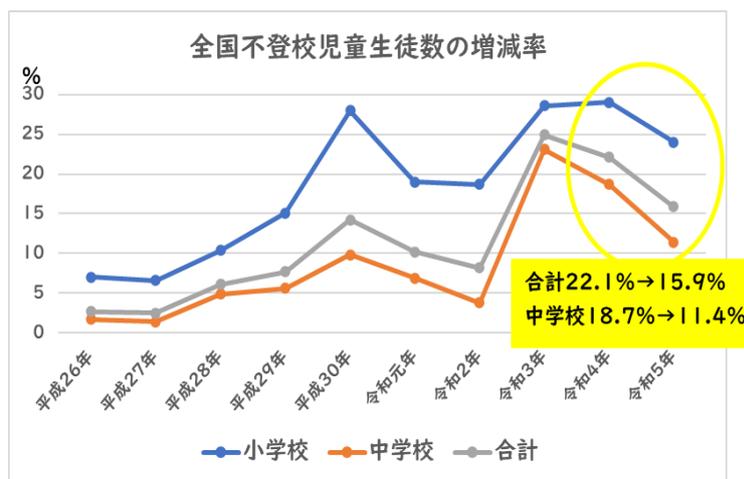


不登校自体は問題行動ではないが、子どもたちが教育を受けられないことは学習のみならず、心身の発達に影響を与える可能性がある。文科省の調査による「不登校児童生徒について把握した事実」によると、「学校生活に対してやる気が出ない等」(32.2%)、「不安・抑うつ」(23.1%)、「生活リズムの不調」(23.0%)の相談があったことなどが分かった。しかし、このような心身や生活リズムの不調は要因が多岐に及び様々に複合し、実態は個々によって違いがある。

別室登校の生徒たちやそよかぜ学級で学習する生徒たちも、様々な理由で学校や教室以外の学びの場を求めている。不登校の現状はそれぞれに異なり一般論で語ることは適切ではない。個々の状況を踏まえた上での対応が基本である。別室登校では心のリハビリだと考えて、無理せず焦らず、慎重に様子を見ながらペースを上げて通常運転に戻していくことが大切である。無理に行動させたり急がせたりすることはストレスや不安を高め、逆効果になるかもしれない。登校できる日が続いても突然長期の不登校状態になったり、自宅にこもりつきりになったりすることもある。私が生徒たちと関わる上で一番大切にすることは、生徒たちの安心できる場所を壊してはいけないということを念頭に置いて、生徒たちの体調や気分に合わせて取組を進めるということである。声をかけるのはオンライン授業のない時間とし、自主学习以外の読書やイラストを描いている時間に声をかけ、興味を持ってくれた生徒と制作をした。無理強いせず、なんとなくやってみようかなと思わせる雰囲気作りに気を配った。予想していたことだが、不登校や別室登校の生徒たちとの取組は、短期間で目に見える変化が現れることは少ない。また、別室登校の生徒たちもそよかぜ学級の生徒たちもメンバーや人数が毎日異なる。そのため、前の時間登校していた生徒が次の時間には欠席していることも多く、継続的な取組が難しかった。集団での活動が苦手な生徒たちが、美術の作品制作を体験することを通して、自分の内面を見つめ、他者と時間を共有することによって、少しでも心のつながりを持ってほしい。また、

作品を制作することでリラックスしたり達成感を得られたりすれば健康的な生活リズムや集中力を改善させるきっかけにもなり得ると考える。しかしながら、「絵は描きたいけど、みんなと一緒にはしんどいし、見られたくない。」と申し出る生徒があり、2、3人の少人数での活動にも抵抗を感じ、他者との関わりを拒否する生徒もいた。その生徒も個人での制作では意欲的に取り組み、完成した時にはうれしそうな表情を見せ、「集中して取り組むと気持ちが落ち着く」と感想を言ってくれた。制作途中に見せてくれた生徒たちの笑顔や驚きの表情、「楽しかった」「今日は何をするのですか？」という言葉が今後の希望となっている。

6 おわりに



全国の不登校の総数は増加しているが、前年度からの増加率は、令和5年度は15.9%で令和4年度の22.1%から下がり、増加の勢いは鈍っている。これは中学校が18.7%から11.4%に下がったことが要因である。文科省では令和5年3月から不登校対策プランを打ち出し、居場所づくりや相談体制の充実などを進めており、この効果が出ているとみる。

私たち三好地区の学校現場でも個々の生徒たちに応じた支援をするために問題となるのが人材の不足である。そよかぜ学級でも別室登校でも常時対応できる人材が必要である。また、東みよし町に住む生徒が池田町にあるそよかぜ学級に通うには、送迎や交通費の問題が生まれ、そのために諦めてしまう家庭も多い。誰一人取り残されない学びの保障に向けて学校、家庭、地域社会、関係機関、行政が一体となって取り組むべき課題である。

〈参考文献〉

- ・令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果 (文部科学省 令和6年10月31日)

https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_1_2.pdf

- ・溝上義則(2019)『アートセラピーBasic－精神科作業療法・デイケアで使いたい12のメゾット－』新興医学出版社
- ・栗本美百合(2018)『学校でできるアート・アズ・セラピー－心をはぐくむ「ものづくり」－』誠信書房

既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）

集	年度	内 容
30	平成 元	園外の地域環境を生かし、幼児の主体性を育てるための活動は、どのようにすればよいか 幼稚園第2ブロック共同研究 小規模校の特性を生かし、児童一人一人に応じた指導をめざして －学校・家庭・地域が一体となって－ 池田町 下野呂内小学校 「子どもが生き生きと取り組む、豊かな教育活動」－ふるさと意識を高めるために－ 山城町 山城小学校 明日を担う心豊かで自主性のある生徒の育成－ボランティア活動を通して－ 井川町 井川中学校 へき地の特性を生かし、一人一人がたくましく伸びる魅力ある学校の創造 －同単元類似内容の指導の試み－ 池田町 出合小学校 郡内家出少女についての考察 三好郡青少年育成センター 久原 啓治 樹木画に見られる心の世界Ⅱ－児童・生徒の理解と援助のために－ 三好郡教育研究所員 入江 宏明
31	平成 2	ふるさととの活性化をになう子どもたちの自発性をほりおこすために 西祖谷山村 善徳小学校 教諭 徳善 之浩 体験を通して豊かな心を育て、実践まで高める道徳教育 三加茂町 三庄小学校 教諭 吉田美千代 一人一人が主体的に取り組む、活力ある生徒の育成をめざして 池田町 池田第一中学校 教諭 小島 治子 西字小学校における生活科年間計画－平成4年度教育課程完全実施へ向けての新しい試み－ 山城町 西字小学校 教諭 内田三千代 英語指導助手（AET）とのティーム・ティーチングを通して －コミュニケーション能力の育成のために－ 池田町 池田中学校 教諭 木藤 康子
32	平成 3	主体的な生活を促す幼稚園教育－人とのかわりをとおして－ 第3ブロック幼稚園 池田町 川崎幼稚園 教諭 林 節子 馬場幼稚園 教諭 丸岡 明美 西山幼稚園 教諭 東川たつ子 子どもが主体的に取り組む特別活動－たて割り班の活動を通して－ 井川町 井内小学校 教諭 立川 義輝 自らが心身ともに健康な体づくりに取り組む児童の育成 －進んでむし歯予防に取り組む白地っ子を目指して－ 池田町 白地小学校 養護教諭 平田志津子 生徒が生き生きと活動するための手立てはどのようなであればよいか－学校行事などの活動を通して－ 山城町 山城中学校 教諭 佐藤英一郎 一人ひとりを生かす評価活動－学習意欲を高める理科の指導－ 三好郡教育研究所員 藤本 智恵
33	平成 4	主体性を伸ばし、実践力を育てる特別活動 －個性を重視した、たて割りグループによる児童集会活動を通して－ 山城町 大野小学校 教諭 上田 優 へき地小学校における性教育についての研究－性教育の実践を通して－ 東祖谷山村性教育研究会 和田小学校 教諭 松村 直也 ふるさとを愛する心の育成を目指して－体験的活動を通して－ 西祖谷山村 西祖谷中学校 教諭 篠原 一仁 中学校国語科書写における行書指導－行書を活用した筆写活動の日常化をめざして－ 三好郡教育研究所 研究員 岸 敬子
34	平成 5	健康でたくましい子どもの育成をめざして－主体的に取り組む活動－ 第3ブロック幼稚園 教諭 上林加津子 永田 協子 自然に感動し、主体的に学び続ける児童の育成 －一人一人の表現活動を高め、科学的な見方や考え方を育てる理科学習－ 三野町 王地小学校 教諭 安西 政和 自ら学び、自らきたえる心豊かな子どもの育成－ボランティア活動をとおして－ 三好町 昼間小学校 教諭 武岡 澄代

		奉仕等体験学習を通して、思いやりのある心豊かな生徒の育成 池田町 池田中学校 教諭 古林 久代 英語指導を通して平和教育をすすめる一私案 -ピース・メッセージの実践を通して- 三好郡教育研究所 研究員 長谷 郁代
35	平成 6	地域に開かれた学校づくり -すこやかな児童の育成をめざした、地域ぐるみで取り組む学校行事- 山城町 大和小学校 教諭 久保 満男 小規模校における環境教育の取り組み -教科、特別活動の実践を通して- 池田町 馬路小学校 教諭 細川 敬雄 地域とともにあゆむ生徒の育成をめざして 三好町 三好中学校 教諭 玉木 利典 選択履修の幅の拡大 -家庭科- 三好郡教育研究所 研究員 佐々木待子
36	平成 7	主体的な生活を促す幼稚園教育 -幼児が自分らしさを発揮して生活する環境と援助を考える- 第4ブロック幼稚園 山城幼稚園 蔵下美千子 思いやりのある心豊かな児童の育成をめざして -「いじめ」を許さない学校づくりへの取り組み- 三加茂町 加茂小学校 教諭 小笠 健二 「郷土を愛し、心豊かな児童の育成を目指して」 -体験学習・ボランティア活動を通して- 西祖谷山村 吾橋小学校 教諭 濱口 久弥 生徒会活動の活性化をめざして -自ら考え、行動する生徒会活動への教師の支援- 三加茂町 三加茂中学校 教諭 山西 敏広 生活に生きる書写力の育成を目指して -中学1年生への意識調査と実践例- 三好郡教育研究所 研究員 栗田 典子
37	平成 8	地域に根ざした福祉・ボランティア教育 -施設訪問を通して- 井川町 辻小学校 細川 文男 『ふるさとを愛し、人間として主体的に生きる生徒の育成』 山城町 大野中学校 小学校国語の文法的事項の指導 -「何について」「どのように」「どこまで」指導するか- 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代
38	平成 9	幼稚園において、幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくりだすためには、環境を どのように構成すればよいか 第1ブロック幼稚園 教諭 宮成 典子 物やお金を大切に、思いやりのある豊かな心を持つ児童の育成 池田町 三縄小学校 教諭 森本 明子 環境教育 Think Globally, Act Locally を目指して -積極的に環境と関わり、責任ある行動がとれる生徒の育成- 三野町 三野中学校 教諭 丸岡 美枝 学校不応問題の諸相と教師の援助について 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子 学級担任の教師が行う教育相談 -ある不登校児とのかかわりを通して- 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代
39	平成 10	身近な環境に意欲的にかかわり、よりよい環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる児童 の育成 山城町 政友小学校 教諭 大西公美子 一人一人の個性を尊重し、豊かな心と、『生きる力』を育むために -地域に育てられ、地域と共に伸びる生徒の育成- 東祖谷山村 東祖谷中学校 教諭 梶原真里子 今、子どもたちの心は? -三好郡内小中学生意識調査から- 三好郡教育研究所 研究員 吉岡 弘恵 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子
40	平成 11	魅力ある幼稚園教育の創造 (三好町三園の取り組み) -生活体験や自然体験を通しての生きる力の育成- 三好町内幼稚園 ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ、心豊かな子どもの育成 -名頃を見つめ、名頃を愛する学習を通して- 東祖谷山村 名頃小学校 教諭 橋本 隆 「人権感覚豊かな心」と「共に生きる力」を育む教育の創造 -「選択の時間」を生かした取り組みの中で- 井川町 井川中学校 教諭 内田 典善 授業の効果を高めるためのコンピュータ利用のあり方 三好郡教育研究所研究員 西井川小学校 吉岡 弘恵 英語科においてコミュニケーション能力を育成するために 三好郡教育研究所研究員 三好中学校 新居 信子

41	平成 12	<p>「ひと・もの・こと」とのかかわりを通して、生きる力を育む王地学習 王地小学校 教諭 北川ひとみ</p> <p>自ら学び、自ら考え、主体的に行動する生徒の育成 -地域の特性を生かした取り組みの中で- 池田第一中学校 教諭 立花 久</p> <p>三好郡における情報教育の現状とその考察 -郡内小中学生・教職員の意識調査から- 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵 三好郡教育研究所 研究員 三好中学校 新居 信子</p>
42	平成 13	<p>「生きる力」を育む幼稚園教育のあり方 -幼児が自ら生活していくための教師の役割- 白地幼稚園 教諭 木徳 友子</p> <p>「ふるさとを愛し、共に学びあう心豊かな児童の育成」 -へき地の特性を生かした様々な体験活動をとおして- 東山小学校 教諭 高篠 佳子</p> <p>生きる力を養う生徒の育成 山城中学校 教諭 白井 正道</p> <p>TT授業や少人数授業を実施した徳島県の連絡協議会資料(平成12年度・13年度)から中学校数学におけるTT授業について考察する 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵</p> <p>自ら学び、豊かな心を育てる学校図書館についての研究 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵</p>
43	平成 14	<p>豊かな感性をはぐくむ教育の創造 -金子みすゞの心を活かした詩の指導をとおして- 三好郡教育研究所 研究員 西井川小学校 小角 昌美</p> <p>数学で基礎基本の力をつける方法をさがして 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵</p> <p>地域における教育ネットワークの活用とコーディネータの役割 -学校インターネット指定から始まった三好郡の教育ネットワーク- 三好郡ネットワークセンターICTコーディネータ 中川 斉史 生藤 元</p>
44	平成 15	<p>生きる力をはぐくむ幼稚園教育のあり方 -身近なものに興味を持ち、活動を豊かにするためには、教師はどのようにかかわればよいか- 吾橋幼稚園 教諭 山口 里子</p> <p>「生きる力」を育む総合的な学習 -ふるさとを愛し、人や自然と積極的にかかわろうとする児童の育成をめざして- 出合小学校 教諭 岡 佳子</p> <p>「ふるさとを愛し、豊かな感性を持ち、自らの力で未来を創造しようとする子どもの育成」 西祖谷中学校 教諭 富永 浩史</p> <p>「生きる力」をはぐくむ美術教育美術の基礎基本の力を身につけ、個性を生かす指導について -人として心豊かに生きていくことのできる力を育てるために- 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代</p> <p>生きる力をはぐくむ教育の探求 -「本との出会い」をとおして- 三好郡教育研究所 研究員 小角 昌美</p>
45	平成 16	<p>ふるさとの歴史や自然、文化にふれる活動を通して、自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校 教諭 高岡 和恵</p> <p>『地域から学ぶ「生きる力」の育成』 池田中学校</p> <p>「みる力」を育てる美術教育 -美術の基礎・基本をみつめて- 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代</p> <p>学校の情報化をどのように進めるか 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元</p>
46	平成 17	<p>幼稚園において、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第1ブロック 三野町・三加茂町幼稚園研究グループ</p> <p>地域や学校の特性を生かし、一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校 教諭 鶴田 美枝</p> <p>地域や人に関わる体験的な活動を通して、自ら考える生徒の育成 三好中学校 教諭 野田 圭祐</p> <p>三好郡小学校における情報教育の現状について 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元</p> <p>文字式の指導に関する研究 -1年文字式における生徒の理解の仕方について- 三好郡教育研究所 研究員 上田 美恵</p>

47	平成 18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 -主体的により良く伝え合う力の育成をめざして- 西井川小学校 教諭 丸本 豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 -共に生きる町づくりについて考えよう- 三加茂中学校 教諭 玉木 利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状 三好教育研究所 研究員 生藤 元
48	平成 19	「健全な心身の成長をめざして」 -高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながら- 第2ブロック 三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」自らの食生活に関心を持ち、す すんで健康づくりに取り組む子どもの育成 -学校・家庭・地域の連携した取り組み- 池田小学校 栄養教諭 大西 欣美 「確かな学力」を身につけさせるために -プレゼンテーション能力の育成とICT機器の利用- 三野中学校 教諭 中川 悌二 「グラフを書くのは何のため？」 -何でもかんでも「%」からの脱却で、知的な分析を- 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 -子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えよう- 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「中学校理科におけるICT機器の活用」 -評価活動におけるマークシートの利用- 三好教育研究所 研究員 山田 泰弘
49	平成 20	ふるさとを愛し、ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 椋生小学校 教諭 谷川 智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 -『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心として- 東祖谷中学校 教諭 高崎 英和 授業カイゼンとICT活用 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 体育科における効果的なICT機器の活用について 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 -構成的グループエンカウンターの考え方を生かして- 三好教育研究所 研究員 石丸 秀樹
50	平成 21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして -人やものとのかかわりを深め、豊かな感性や思考力の芽生えを育てる- 山城幼稚園 教諭 山中あけみ 池田幼稚園 教諭 大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 -習得型学力から活用型学力へのステップ- 足代小学校 教諭 熊井 美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる 井川中学校 教諭 村上 郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 -小・中における英語教育の連携を目指して- 三好教育研究所 研究員 藤本 恒幸 授業におけるICT活用の促進についての課題 三好教育研究所 研究員 福田 ミカ
51	平成 22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 -人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求- 芝生小学校 教諭 小原 敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる 山城中学校 教諭 内田 清文 実物投影機の活用目的の明確化 -実物投影機利用意図の可視化を通して- 加茂小学校 教諭 福田 ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 -三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より- 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
52	平成 23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 -小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」- 大野幼稚園 教諭 谷本 紀子 地域から学び、ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 -学びを生かし、自らを表現できる佐野っ子をめざして- 佐野小学校 教諭 山田 知弘 人や地域とつながり、協働できる生徒の育成 -「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして- 西祖谷中学校 教諭 西岡ひとみ

		三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ 平成23年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 ーグループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業よりー	三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
53	平成24	家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり ー小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学びー 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 ーE S D（持続発展教育）の視点を取り入れてー 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 ー学級担任アンケート調査と研究授業よりー 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること	東祖谷小学校 教諭 森永 直美 池田中学校 教諭 丸岡 美枝 昼間小学校 教諭 山口 恭史 三好教育研究所 研究員 山下 達也 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
54	平成25	豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 ー様々な体験活動を通じて、地域の人々や同年齢、異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究ー 地域とともにある学校をめざして ー地域の教育力を生かして育てる三庄っ子ー 生徒一人ひとりの思いが尊重され、つながりを大切にする活動を通して 複式学級における指導の充実を目指して I C T活用の推進と情報モラル教育	昼間幼稚園 教諭 佐藤 重美 三庄小学校 教諭 三好美智代 三好中学校 教諭 近藤 剛 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
55	平成26	家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践 ー多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践ー 豊かな心と、自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造 ー学校図書館を中心としてー 小中連携教育ー東祖谷小中学校の取り組み 複式学級におけるパソコンを活用した算数科の授業 社会科における思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫 ー討論活動を取り入れた授業づくりー	井内小学校 教頭 住田 克弘 三加茂中学校 教諭 山下ちづる 三好教育研究所 研究員 岡本 博一 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
56	平成27	自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成 ー地域との交流を通してふるさとの魅力再発見ー 出会いをつなぎ、自己を見つめ、自他の人権を尊重する生き方を求めて ー識字学級との交流を通してー 「読む知る感じる」読書環境をめざして ー学校図書館教育の実践と課題ー 児童・生徒の生活環境の改善を目指して ーネット端末（スマホ等）の使用時間を見直してー	箆蔵小学校 教諭 藤原 隆司 三野中学校 教諭 尾形 君代 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
57	平成28	地域から学び、郷土を愛し、主体的にたくましく生きる児童の育成 ー様々な人とのかかわりや体験活動を通してー 「生きる力」を育む土曜授業実践の成果と課題 関わりの中で主体的に学び豊かな感性を育む鑑賞教育 ー見て、考えて、表して、意見を交わすー	山城小学校 教諭 井上 清隆 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 三好教育研究所 研究員 宮成万寿美
58	平成29	変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成 ー身近な自然や人とのかかわりをとおして しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫ー 豊かな心を持ち、未来に向かって主体的に行動する子どもの育成 ー一人一人のちがいを認め、助け合う仲間づくりを通してー 社会科デジタル教材の開発と活用 ーI C Tの有効な活用をめざしてー 生徒の意欲関心を高め、豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて ー美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通してー	西井川幼稚園 教諭 元木 真砂代 王地小学校 教諭 濱口 ミエ 三好教育研究所 研究員 常村 淳 三好教育研究所 研究員 宮成万寿美

59	平成 30	<p>自らの命を守り抜くために主体的に行動する態度の育成 ～実践的な安全教育の取り組みを通して～ <small>昼間小学校 教諭 久原 有里</small></p> <p>生徒の意欲関心を高め、豊かな感性を育成する主体的な学びについて <small>～美術科におけるデジタル教材の作成と活用を通して～</small></p> <p>三好教育研究所教育研究所 研究員 宮成 万寿美（現三野中学校） <small>興味関心を高め、基礎学力向上に役立つデジタル教材の開発と活用</small></p> <p><small>三好教育研究所 研究員 常村 淳</small></p> <p>誰もが分かる、楽しい授業を目指して ～ICTの活用とUDを取り入れた授業の工夫～ <small>三好教育研究所 研究員 立花 志津</small></p>
60	令和 元	<p>小規模校における児童の資質・能力の育成 ～「何ができるようになるか」に焦点をあてて～ <small>白地小学校 教諭 小越 彩佳</small></p> <p>豊かなかかわり合いの中で、たくましく自立できる子どもの育成 ～15歳の旅立ちに向けて～ <small>東祖谷中学校 教諭 西野 猛</small></p> <p>オリンピック・パラリンピックを活用した教育 <small>三好教育研究所 研究員 中瀧 由紀</small></p> <p>安全で楽しい理科の観察・実験 <small>三好教育研究所 研究員 立花 志津</small></p>
61	令和 2	<p>豊かな体験活動から学びを拓き、深める吾橋教育 ～へき地・複式・小規模校の特性を生かして～ <small>吾橋小学校 教頭 井上 清隆</small></p> <p>表現リズム遊び・表現運動の指導の現状 –調査から分かったこと、研修会で学んだこと– <small>三好教育研究所 研究員 中瀧 由紀</small></p> <p>小学校の授業で活用できるプログラミング教育教材 <small>三好教育研究所 研究員 橋本早弥香</small></p>
62	令和 3	<p>子どもの姿から考える幼小の接続について ～遊びから学びへ向かう子どもたち～ <small>三縄幼稚園 主任教諭 真鍋 友子（現白地幼稚園）</small></p> <p>持続可能な食環境(食育ベース)の構築と「食の力」を身に付けた児童の育成 <small>～「マスク・手洗い消毒・3密を避ける」だけじゃない！！『体の中からコロナ感染予防対策』～</small> <small>辻小学校 教諭 大岩 彩菜</small></p> <p>低学年における「平仮名・片仮名」の読みの流暢性を目指して <small>三好教育研究所 研究員 上野三千代</small></p> <p>プログラミング教育の普及と指導方法の探究 ～2年間の実践研究を終えて～ <small>三好教育研究所 研究員 橋本早弥香</small></p>
63	令和 4	<p>ポジティブな行動支援の手法を活かした授業改善の取組 <small>～「わかった」を「できた」にする算数科の授業づくり～</small> <small>加茂小学校 教諭 久原 有里, 教諭 森長 拓哉</small></p> <p>低学年における平仮名・片仮名の効果的な指導について <small>～2年間の研究を通して～</small> <small>三好教育研究所 研究員 上野三千代</small></p> <p>コミュニケーションを意識した英語力の向上にむけて <small>～「十分に慣れ親しむ」ために～</small> <small>三好教育研究所 研究員 リーデル章代</small></p>
64	令和 5	<p>小規模校の特性を生かした教育活動の推進 <small>～他校とのオンライン学習の実践を通して～</small> <small>馬路小学校 教諭 中山 祐子</small></p> <p>変化する社会の中で、学校規模にあった持続可能な学校運営のあり方 <small>～心豊かにたくましく生き抜く『人材』を育む教育活動～</small> <small>三好市立井川中学校</small></p> <p>外国語学習から『学級づくり』 <small>～外国語の特性であるコミュニケーションを生かして～</small> <small>三好教育研究所 研究員 リーデル章代</small></p> <p>主体的に運動する子どもの育成 <small>～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～</small> <small>三好教育研究所 研究員 松本 美穂</small></p>

65	令和 6	<p>ふるさと西祖谷に夢や誇りをもち、未来の創り手となる子どもの育成 ～へき地・複式・小規模校の特性を生かした学校・学級経営の深化・充実をめざして～ 櫛生小学校 教頭 井内 康之</p> <p>主体的に運動する子どもの育成 ～「防災体力」を意識した体力づくりを通して～ 三好教育研究所 研究員 松本 美穂</p> <p>別室登校の生徒たちの実際 ～アートセラピー的取組とそよかぜ学級～ 三好教育研究所 研究員 井川 早苗</p>
----	---------	--